第50回　公開研究発表会

2018
6.16

英才教育の追究

知能開発を目指した学習指導
考える力を育てる保育

発表会要項

聖徳学園小学校
聖 徳 幼 稚 園

教育目標

1　一人ひとりの子どもの個性を育てる
2　知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる
3　正しい心、優しい心、たくましい心を育てる

お誓い三か条

一、われわれは　未来をひらく戦士となり
　新しい世界を　開拓します
一、われわれは　恥と涙をわきまえて
　光明正大に　行動します
一、われわれは　祖国の伝統を重んじ
　祖国と人類のために　つくします

発 表 会 要 項

主　題　英才教育の追究

◦知能開発を目指した学習指導
◦考える力を育てる保育

○第 30 年度文部科学大臣から
「創意工夫学校功労賞」を受賞

○平成 29 年度東京都児童生徒発明くふう展に
おいて 30 回目の「学校賞」受賞

幼稚園

お店屋さんごっこ

おすもうさんとのお楽しみ会

理科あそび

運動会

運動会

小学校

ゲーム大会

校外授業

スポーツ大会

第 50 回　公開研究発表会に当たって

～知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育～

聖徳学園小学校長
聖 徳 幼 稚 園 長　和　田　知　之

「氷が溶けたら何になる？」という問いに対して、「水になる」という答えだけではなく、「春になる」と言った柔軟な発想を大切に育てていきたいという願いで、1969 年（昭和 44 年）に、個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を開始しました。以来 49 年間、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を目指して、

○主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成

○知能開発～創造的知能の開発と育成～

○一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～

を重点にした教育活動を重ねてきました。

●意欲と集中力の育成で知能と学力の向上

我が国では最近、小学生から大学生に至るまで学力低下の問題が話題になっています。その原因として、子どもたち自身の学習意欲と集中力の低下が大きな要因ではないでしょうか。

知能や学力の向上はもとより、子どもたちが将来社会で活躍していく上でも重要な資質は意欲と集中力になるとの考えから、私たちは幼稚園から小学校低学年までは、まず意欲と集中力の育成に重点をおいています。積極的な意欲と集中力のある子どもの場合は、仮に学校での学習時間や内容が少なくなっても、それこそ「1 教えたら 10 学ぼう」とする意欲を発揮して、自分から主体的に学習を進めていくことができ、また習得率も高くなるからです。

入園したばかりの年少児（3 歳児）の知能あそびを見ていると、一つの遊びに集中できる時間はせいぜい 15 分から 30 分程度です。なかには、教師の説明はほとんど聞

けず、周囲のことが気になり立ち歩くなど、なかなか集中して取り組めない子もいます。それが3学期頃になってくると、ほとんどの子が40分ぐらいは集中が持続出来るようになってきます。年長児（5歳児）になると、与える教材（遊びの内容）さえ適切であれば、80分間の知能あそびの時間が過ぎて昼食の時間になっても、「もっとやりたい!」言って、遊びを継続することもしばしばです。

このように幼稚園時代は、一人ひとりの子どもをよく観察していると、見違えるように意欲と集中力が身についてくることが分ります。この幼児期の3年間の成長は、小学校入学後の3年間の成長の比ではありません。特に、高学年になっても意欲と集中力が十分身についていない子どもの学習指導は、大変苦労が伴います。ですから、私たちは幼稚園と小学校の指導上の連携を深め、3歳児から3年生ぐらいまでは、意欲と集中力の育成、つまり主体的に学ぶ態度を育てることに重点をおいているわけです。

こうした意欲と集中力を育成していくためには、日頃から授業（遊び）研究を深め、授業内容や方法に工夫が必要になることは言うまでもありません。子どもたちが授業（遊び）に意欲的に集中して取り組む条件としては、

○学習（遊び）内容に興味・関心があること

○難易度が適切であること

○学習内容に発展性があること

等が重要な要素になってきます。ですから聖徳では、平素から教材研究と教材・教具の作成にはかなり力を注いでいるのです。こうして低学年の間に、意欲と集中力を育成しておくと、高学年になるにつれて学力もめきめきと向上してきます。

よく聖徳学園小学校の卒業生は、中学や大学への進学実績が高いが、どのような受験指導をしているのかと言ったような質問を受けます。学校では、特別な受験指導をしているわけではありませんが、受験においても意欲と集中力、知能教育の成果は、結果的に大きなプラスになっていることは事実です。このことは、中学受験より大学受験と上級学校になればなるほど、効果を発揮しています。

●創造的知能の開発と育成

意欲と集中力の成果は、学力の向上だけではありません。創造的知能の開発と育成にも大きな成果を発揮してきます。

創造性の教育成果は、評価することはなかなか難しいのですが、一例として発明協会が毎年実施している、「東京都児童生徒発明くふう展」での成果を紹介します。聖徳では、毎年夏休み明けの９月に自由研究展を開催します。これにはほとんど全員の児童が、自分の興味・関心に基づき課題を見つけて、それについてまとめたり製作した作品を出品しています。児童によっては、小学校６年間一貫したテーマで研究を継続して取り組んでいる者もいます。この中から、校内審査を経て「東京都児童生徒発明くふう展」に該当する作品を 15 点（1 校あたり 15 点までに限定）出品します。その結果、毎年 10 点くらいの作品が入賞し、これまで 30 回「学校賞」を受賞しました。そして東京都代表として全国コンクールに出品され、毎年２～３名の作品が入賞しています。

こうした成果を過分に評価していただき、今までに文部科学大臣から８回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞いたしました。このように、創造的知能の開発と育成では成果を挙げてきたように思っています。この創造性の開発と育成の条件を、これまでの実践結果から要約すると概ね次の通りです。

① 創造的態度を育成する
　意欲・集中力・好奇心・根気・いろいろ工夫する態度等
② 個性を啓発して伸長する
③ 創造的知能を刺激し育成する
④ 直観力（直観的思考・ひらめき）を育成する
⑤ 個性と創造性を認め合える学校環境を整える

等です。本日の授業の様子から、少しでも汲み取っていただければと思います。

●個性と能力差に対応した複数指導（担任）制

子どもの個性や能力･発達段階は、一人ひとり異なることは言うまでもありません。これに対して一人ひとりにきめ細かな指導をしていくためには、まず少人数による学級編成が必要になってきます。少人数といっても、学校では子ども同士学び合い、刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく側面も大きいので、あまり１学級の人数を少なくすることには教育効果の上で感心しません。また、小集団でなければ、自分の力を発揮できないような子どもに育てても困るのです。

そこで聖徳では、昭和54年度から1学級の人数は30名にして、個人差が顕著な知能訓練や数学の授業において、2人担任制を試みました。これは一つの教室に2人の担任が入って授業を進めるわけですから、2人の担任の綿密な連携が前提になりますが、個別学習に重点をおく知能訓練や数学の授業では、かなり効果を発揮することが明確になってきました。

現在、複数指導（担任）制を実施しているのは、

幼稚園では、学級担任　カリキュラムあそび

小学校では、学級担任　知能訓練　ゲーム　工作　数学（1～3年生）です。

また、学年が進むにつれて能力差は段々広がってきますので、数学と知能訓練では3年生から、そして国語と英語は5年生から能力（習熟度）別にクラス編成して授業を進めております。そのために、一人ひとりの子どもがゆとりを持って授業に取り組み、各自の能力の限界に挑戦することが可能になります。

本学園では複数指導（担任）制のねらいを、

①　できるだけ多く（複数）の教師の眼で一人ひとりの子どもを指導する

②　一人ひとりの子どもの個性と能力差に対応したきめ細かな指導をする

この2点においています。本日の授業を通して、複数指導（担任）制の利点を見ていただけたらと思います。

以上の通り、聖徳の教育の基本的な考え方と本日の公開授業（保育）の視点を簡単にまとめておきました。私たちの趣旨を少しでもご理解いただければ幸いです。

また、本日の授業（保育）内容につきましては、「懇談会」において、意見交換していきたいと思います。どうぞお気軽にご出席ください。このところ学校教育のあり方について関心を集めておりますが、21世紀を生きる子どもたちの健全な成長を求めて、皆さん方と共に理想的な授業のあり方を追究していきたいと考えております。本日は、ご参会いただき誠にありがとうございました。

目　次

第50回　公開研究発表会に当たって …… 5
発表会要項（時程表） …… 11
会場案内図 …… 14

幼稚園の指導案
◇**公開保育**〈9：15～10：00〉
本日の保育について …… 17
３歳児（ほし組）「クラス活動（知能あそび）」 …… 18
３歳児（はな組）「クラス活動（リトミックあそび）」 …… 21
４歳児（そら・もり組）「リトミックあそび」 …… 23
４歳児（そら・もり組）「体育あそび」 …… 26
５歳児（つき組）「知能あそび」 …… 28
５歳児（やま組）「造形あそび」 …… 32

小学校の指導案
◇**公開授業**〈9：20～10：20〉
１年生（つばさ組）「知能訓練」 …… 37
１年生（みずほ組）「数学」 …… 41
２年生（あさぎり組）「理科」 …… 44
２年生（しらさぎ組）「リーダーインミー」 …… 46
３年生（あさま・ほくと組）「知能訓練Ａ」 …… 48
３年生（あさま・ほくと組）「知能訓練Ｂ」 …… 52
４年生（のぞみ組）「英語Ⅰ」 …… 55
４年生（のぞみ組）「英語Ⅱ」 …… 57
４年生（はやて組）「歴史」 …… 59
５年生（くろしお組）「地理」 …… 62
５年生（はやぶさ組）「理科」 …… 64
６年生（はまかぜ・わかしお組）「国語Ａ」 …… 66
６年生（はまかぜ・わかしお組）「国語Ｂ１」 …… 69
６年生（はまかぜ・わかしお組）「国語Ｂ２」 …… 72

全体会〈10：30 ～ 11：40〉…… 77
あいさつ
園児・児童発表　5歳児　歌　唱
　　4年生　合　唱
研究発表「学校生活で知能を伸ばす」

平成30年度の研究活動計画
研究部の活動計画 …… 81
知能教育研究部の活動計画 …… 83
国語科研究部の活動計画 …… 84
数学科研究部の活動計画 …… 85
英語科研究部の活動計画 …… 86
理科研究部の活動計画 …… 87
地理科研究部の活動計画 …… 88
歴史科研究部の活動計画 …… 89
体育科研究部の活動計画 …… 90
音楽科研究部の活動計画 …… 91
美術科研究部の活動計画 …… 92
家庭科研究部の活動計画 …… 93
研究発表会のあゆみ …… 95

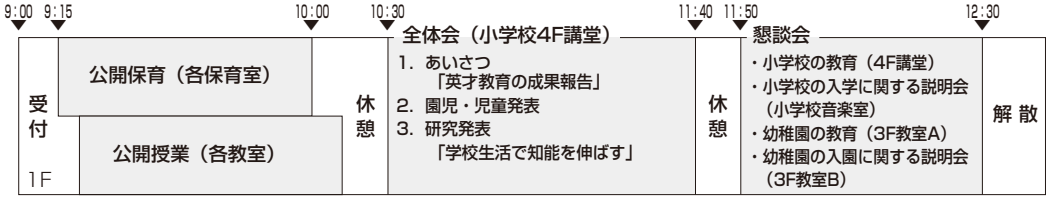
発　表　会　要　項

1．主　題：英才教室の追究

知能開発を目指した学習指導（小学校）

考える力を育てる保育（幼稚園）

2．時　程



3．内　容

(1)　授業公開及び保育公開

◇　**公開保育**（幼稚園　9：15 ～ 10：00）　**※4歳は、興味・関心に応じた選択制になっています。**

年齢	組	領　　域	あそび設定の視点	あそびの題目及び内容	会場	頁
3歳	ほし	クラス活動（知能）	聞く力を育み、概念（ことば）の世界を広げる指導	「聞きとりあそび」 ～お話を正しく理解しよう～	ほし	18
	はな	クラス活動（リトミック）	一人ひとりの表現を育てる二人指導	3匹のこぶたの世界を楽しもう ～お家をたてよう～	はな	21
4歳	そら もり (選択制)	リトミック あ　そ　び	一人ひとりの能力を伸ばす二人指導	マットを使ったゲームにチャレンジしよう ～島渡ゲームに挑戦～	そら	23
		体育あそび	一人ひとりの想像力を豊かにする表現活動	イメージの世界を楽しもう！ ～タイムマシーンに乗って出発だ!!～	幼稚園ホール	26
5歳	つき	知能あそび	推理する楽しさを育む指導	「色パズル」 ～3色のピースをクロスさせて完成しよう～	やま	28
	やま	造形あそび	見通す力を育む造形指導	「ビー玉ゲーム」 ～木片を組み合わせて作ろう～	つき	32

◇　**公開授業**（小学校　9：20 ～ 10：20）

学年	組	教 科	授 業 設 定 の 視 点	授業の題目及び内容	会場	頁
1年	つばさ	知能訓練	パズルを通して推理力を育てる指導	『線路図の完成』 ～線の特徴を手掛かりに見通しを立てて考えよう～	つばさ	37
	みずほ	数　学	創造的知能の開発を目指した学習指導	『テンズゲーム』 いくつといくつで10になるかを対戦型のゲームを通して考えていきます。	みずほ	41

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
2年	あさぎり	理　科	かげのでき方を考察し、創造的知能の開発と育成を目指す指導	光源と物との位置関係と、できるかげの長さについて考えます。	情報室	44
	しらさぎ	リーダーインミー	一人ひとりが自らの考えを深められる学習指導	『幸せになるルール』 子どもたちの考える幸せとは？ 2年生なりに考え、表現していきます。	しらさぎ	46
3年	あさま ほくと （能力別クラス）	知能訓練A	ゲームに勝つための判断力育成を目指した指導	『熟語ポーカーゲーム』 ～熟語をたくさん作って最高得点をねらおう～	ほくと	48
		知能訓練B	図形での転換力を活かした拡散思考を育てる指導	紙帯シチヘンゲ ～1cm幅の紙帯を変身させよう～	あさま	52
4年	のぞみ	英語Ⅰ	一人ひとりの興味・関心に応じた英語教育	夏のイングリッシュキャンプに向け、英語の基礎力と実践力の向上を目指します。	のぞみ	55
		英語Ⅱ	一人ひとりの興味・関心に応じた英語教育	夏のイングリッシュキャンプに向け、英語の基礎力と実践力の向上を目指します。	はやぶさ	57
	はやて	歴　史	昔話の場面絵を通して想像力を高め創造的知能の育成を目指した学習	平家物語「壇の浦の戦い」を聞き、独自の構図・視点で場面絵を描いていく。	はやて	59
5年	くろしお	地　理	興味・関心に応じて魚介類の生産を考えていく学習	寿司は、どこから来たの？ ～寿司ネタのルーツを探ろう～	くろしお	62
	はやぶさ	理　科	力学的な現象の考察を通して、創造的知能を活用した学習	より高く上って行くようにするにはどうすればよいのか調べ、球に働く力の理解を深めます。	理科 実験室	64
6年	はまかぜ わかしお （能力別クラス）	国語A	「仮想し推量する」という構えが獲得されているか否かを問う	『夜のくすの木』を用い隠された世界を見抜くことで仮定推量の構を獲得する。	はまかぜ	66
		国語B1	論説文の読解における比喩と論旨の関係を考える	『人間の悩みとあやまち』の文章整序を行い、構成から本文の論旨に迫る。	わかしお	69
		国語B2	論点と解放の為の論法を創造的知能の視点から迫る授業	正論と曲論の違いを理解したうえで、曲論についてその論点と論法を考える。	学習室	72

⑵　**全体会**　（会場：講堂　10：30～11：40）

＊　園長・校長挨拶　「英才教育の成果報告」　園長・校長：和　田　知　之

＊　園児・児童発表　5歳児　歌　唱

4年生　合　唱

＊　研究発表　「学校生活で知能を伸ばす」　歴史科主任：内　藤　茂

⑶ **懇談会**　（会場：講堂・3階教室　11：50 ～ 12：35）

＊　懇談会は、下記の四つの分科会に分かれて行います。

分科会名	主　題		主な出席教員
幼稚園教育	本日の保育・授業をもとに	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 考える力を育てる保育 （保育内容についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。）	幼稚園担当者
小学校教育		創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 知能開発を目指した学習指導 （教科教育についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。）	大河内教頭 知能訓練担当者 小学校担当者
幼稚園の入園に関すること	幼稚園の概要および入園についてお知りになりたい方はこちらにご出席ください。		松浦教頭 幼稚園担当者
小学校の入学に関すること	聖徳学園小学校入学についてお知りになりたい方はこちらにご出席ください。		校長 小学校担当者

＊　**総合案内**（9：00 ～ 10：30）

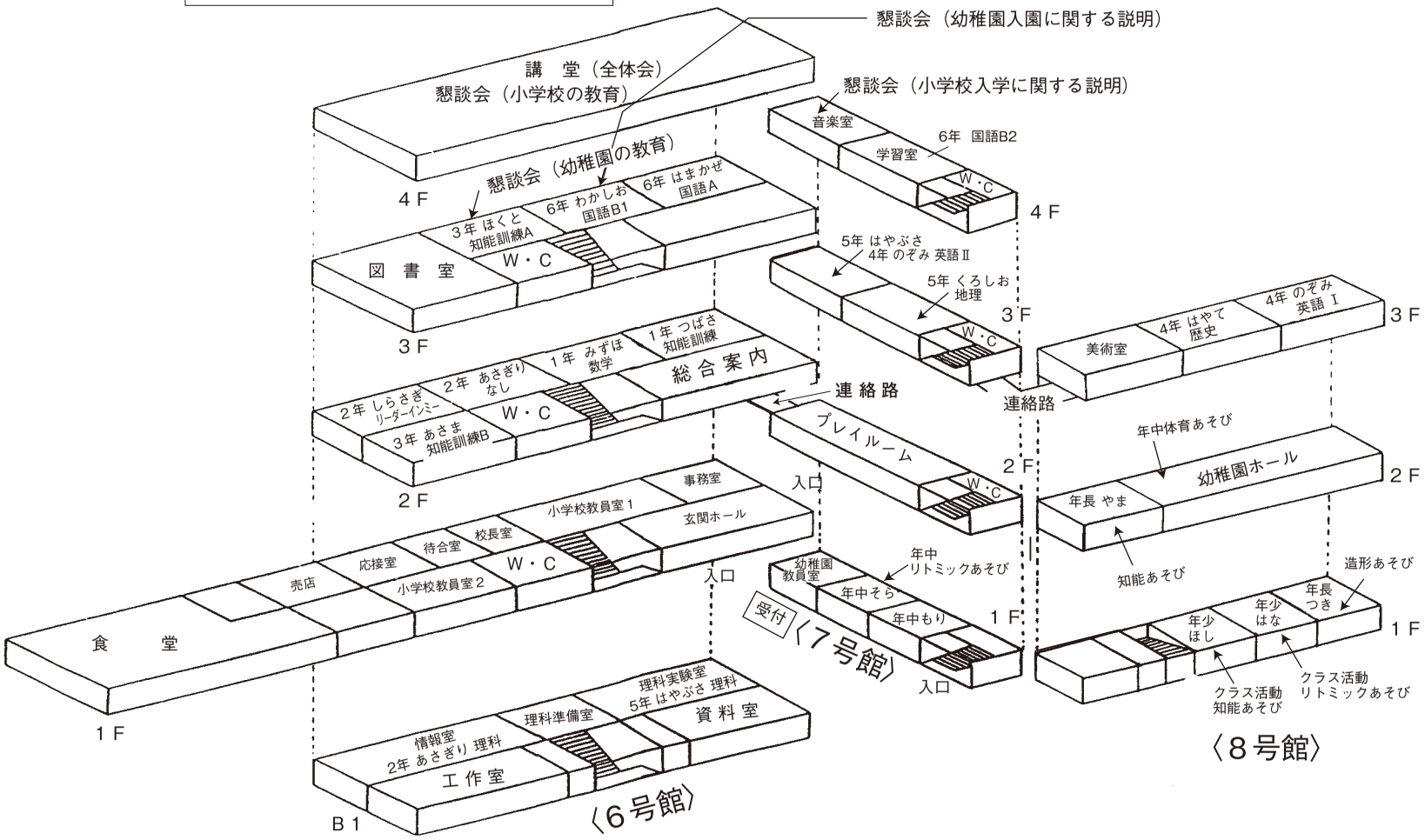
6号館2Ｆ（１年みずほ組前廊下）に、教職員・案内役が待機しております。教室の場所、授業案内等、ご質問がございましたら、お気軽にお声がけください。

また、本日の内容及び本学園の教育についてのご意見やご質問がありましたら、懇談会へ是非ご参加ください。そちらでお受けいたしております。

聖徳学園 幼稚園 小学校 案内図

上段：教室名
下段：授　業

６号館と７号館は２階で、７号館と８号館は３階で連絡しています



幼 稚 園 の 部

本日の公開保育について

本園では、「自由保育」を実施しておりますが、その主な活動は、

自由あそび

カリキュラムあそび

の２つの方法で進めています。

カリキュラムあそびは、

◇知能あそび

◇体育あそび

◇リトミックあそび

◇造形あそび

◇英語あそび

◇理科あそび

の６つのあそびがあります。

４歳・５歳児は、この中の６つのあそびの中から２つのあそびを設定しました。

園児は２つのあそびの内容を担当の先生より聞いて、自分の好きなあそびの方を主体的に選択して遊びます。

３歳児は、年齢や実態を考慮して、クラス活動の中でカリキュラム遊びを取り入れて、進めています。

本日の活動は下記の通りです。

		９時15分～10時00分	内　容
３歳児	ほ し	• クラス活動 （知能あそび）	「聞きとりあそび」 ～お話を正しく理解しよう～
	は な	• クラス活動 （リトミックあそび）	３匹のこぶたの世界を楽しもう ～お家をたてよう～
４歳児	そら・もり （選択制）	• リトミックあそび	イメージの世界を楽しもう！ ～タイムマシーンに乗って出発だ!!～
		• 体育あそび	マットを使ったゲームにチャレンジしよう ～島渡ゲームに挑戦～
５歳児	つ き	• 知能あそび	「色パズル」 ～３色のピースをクロスさせて完成しよう～
	や ま	• 造形あそび	「ビー玉ゲーム」 ～木片を組み合わせて作ろう～

選択の時間　　９時00分から９時10分　子どもたちが、内容説明を聞いて選択します。
選択の場所　　４歳児　そら組にて行います。

クラス活動（知能あそび）指導案

9：15 ～ 10：00　於：ほし組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと４つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に知能的な遊びを取り入れながら進めていく。

指導者　**松　浦　雅　美**
園　山　恵理子
北　村　満利恵

１．年　齢：3 歳児（ほし組）

２．あそび設定の視点：聞く力を育み、概念（ことば）の世界を広げる指導

３．教材名：聞き取りあそび～お話を正しく理解して遊ぼう～

４．本時刺激される知能因子：概念で体系を認知する（CMS）

５．本時のねらい：発問されたことや、紙芝居の内容を、正しく聞いて理解することにより概念で体系を認知する能力を育てる

６．教材について

乳児期から幼児期における子どもの成長は日々目覚ましく、そこに関わる大人達を感動させたり驚かせたりして、心が揺さぶられることが多い。

この時期に使用する母子手帳にも、首が座った、歯が生えた、歩いた…等、成長の記録を記すページがあるが“意味のあることばを話した”という項目も、そのうちの一つにある。

ことばの一つひとつには意味があり、その意味というのが『概念』になる。概念（ことば）は勝手に生み出されるものではなく、耳や目で得た（感じた）情報が重要になるということは言うまでもない。そういったことからも本時は、聞く力を育てることにより、ことばの世界が広がっていくことをねらい、様々な成長が著しいこの時期に、概念の器を広げるための刺激が大いにできるよう、心掛けていきたいと思う。

例えば、りんごと自転車の絵カードがあったとする。「これは、りんご」「これは、自転車」と名称の確認をすると、それは“単位”で捉えた考え方になるが、これを“体系”という考え方にステップアップさせるとどうなるか。「お母さんがお買い物に行って、りんごを買ってきました。」「男の子が自転車に乗って公園に遊びに行きます。」というように、あるまとまったお話の中での一つとなっていくため、文章全体を把握していかなければならなくなる。難易度は上がるのだが、お話の膨らみが楽しめるようになるのである。紙芝居（本時は体系の部分を狙ってオリジナルのものを使用）での長いお話を理解するとなると、更に聞く力が要求されていく。１対１の個々ではなく、集団としての取り組みとなると、それは、なおさらのこと。

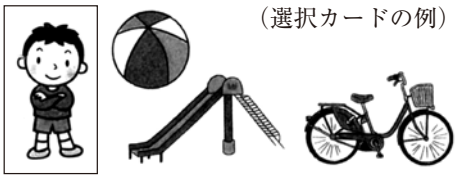
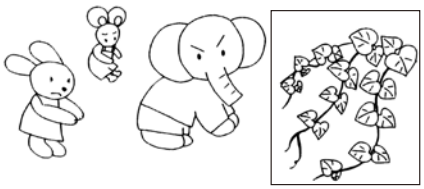
聞く力が定着すると、人生そのものが豊かになっていくこと、そして、知能あそびのねらいである、楽しく遊びながら知的好奇心や考える力（幅広い思考力）を育てていく活動となることを意識

しながら遊びを展開していきたい。

7．園児の様子

入園して約２ヶ月。どの子も生活のリズムをつかみ、好きな遊びを見つけながら園生活を楽しんでいる。自由あそびでは、ブロック遊び、お医者さんごっこ、スクーターやアスレチック、そして、うさぎのお世話にも興味を示しながら毎日過ごしている。知能あそびにおいては、好奇心旺盛な瞳を輝かせながら取り組んでいる姿が印象的である。何よりも、絵本を読んでもらうことが大好きなクラスで、「読んで！」という声がよく聞かれるので本時の反応も楽しみである。反面、まだ年齢的なこともあって、長い時間の集中が難しかったり、いつもとは違う状況に戸惑ったりすることも予想されるので、子ども達の様子を複数指導の目できちんと受け止めていきたい。

8．本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
1. あいさつ・出席確認 2. 展開 (1) 発問（短文）を聞き、その内容に合うよう、個別プリントにシールを貼る。 （問題例） ◎笑っている男の子がいます。自転車に乗れるようになったからです。  （選択カードの例）	○出席確認と共に、本日の健康状態等も把握する。 T（指導者）1：概念の遊びということを踏まえ、絵の名称を確認して丁寧に進めていく。発問が単語ではなく文なので、最後まで正しく聞けるよう、気を付ける。 T２・T３：それぞれ机間巡視をしながら、聞きもらしている子どもがいないか、また理解出来ているかを把握し、適宜助言をする。
(2) 発問（長文）を聞き、その内容に合うよう、お話の場面にシールを貼る。 『さつまいも　どっこいしょ』 	T１：提示カードを用いて確認する時間を設け、子ども達の理解の様子を見る。 T２・T３：机間巡視をしながら、子ども達の取り組み具合を把握し、適宜助言をすると共にT１と連携を図る。

(3) 紙芝居を聞く。 『たのしいピクニック』	T 1：お話が途切れないように気を付けつつ、子どもの発言を大切に拾いながら読み進める。 T 2・T 3：正しく、楽しく聞くことができているか様子を見る。
3. 片づけをし、おわりのあいさつをする。	○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

9．評　価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

クラス活動（リトミックあそび）指導案

9：15 ～ 10：00　於：はな組保育室

指導者　荒　井　明　子
久　保　千　春

1．年　齢：3 歳児（はな組）

2．あそび設定の視点：一人ひとりの表現を育てる 2 人指導

3．主　題：3 びきのこぶたの世界を楽しもう～お家をたてよう～

4．主題について

絵本や紙芝居には、子どもの心をひきつける力がある。毎日の読み聞かせの時間では、どの子どももお話にすっと入り込み、想像力を膨らませている。その時の子どもたちの目はキラキラと輝いている。今回は「3 匹のこぶた」の世界の中で、子どもたちが感じたことを引き出し、表現することを楽しもうと思う。

5．園児の様子

歌うことが大好きなはな組の子どもたち。1 曲歌い終わると「次はこの曲を歌いたい。」と必ずリクエストしてくる。手あそびも好きだが、特に音に合わせて身体を動かすあそびとなると、とても生き生きとした表情を見せる。

リトミックあそびでは、ピアノの音に耳を傾け、音に合わせた表現を楽しむ姿が見られる。

6．本時のねらい

3 匹のこぶたの世界を楽しむ中で、音の高低を聴き分けたり、自分が感じたことを音に合わせて表現する力を養う。

7．本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
準備 ◎裸足になる（上履きと靴下を所定の位置に置く） 手あそびをする 円になる 1. リトミックあそびのうた、あいさつ 2. お返事はい 先生「○○くん」→子ども「はぁい」	準備 ◎空間を広く使えるよう、環境作りをする。 T（指導者）1：全体を通してピアノを中心に活動を進めていく。 T 2：子どもたちと一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。 T 1・T 2：これから活動が始まる意識を持たせるようにする。 T 1・T 2：一人ひとりお返事ができるように呼びかける。

3. ウォーミングアップ 「♩」…歩く　「♩」…ゆっくり歩く 「♫」…かけ足 （合図） ・高い音…頭の上で手をたたく。 ・低い音…しゃがんで床をたたく。	Ｔ１：即時反応のピアノの合図を子どもたちにわかりやすいように伝える。子どもの動きを見て合図を出すタイミングを工夫する。 Ｔ２：なかなか取り組めない子どもがいたら励ましながら、一緒に行う。
4. 『3 びきのこぶた』 ①お話を聞く。	Ｔ１：子どもの興味を引きつけるように話す。
②りんごを拾いながら歩こう。 木になってるりんご（高いところ） 転がっているりんご（低いところ）	Ｔ２：子どもと一緒に元気よく歩く。 Ｔ１：子どもの様子を見ながら合図を出す。 Ｔ１：高いところや低いところに気付けるように声がけをする。
③お母さんぶたの話を聞く。 「お家をたてましょう。」	Ｔ２：こぶたのお母さんになって子どもたちにお話をする。
④どんな家をたてようかな。 “わらの家”…… ふんわり “木の家”…… トントン “レンガの家”… ずっしり	Ｔ１・Ｔ２：家の建て方を子どもと一緒に考える。 Ｔ２：子どもの意見を聞きながら、作る家を決める。友だちと楽しくできるように雰囲気作りをする。
⑤ジュースで乾杯。 「どんなジュースが飲みたいの？」	Ｔ１：果物の名前を模唱する。 Ｔ１：子どもから意見を出してもらう。
⑥お家の周りを散歩する。 スキップする。 「もしかしたら…」そっと歩く。 お家に隠れる。	Ｔ２：怖がる子どもには付き添ってあげる。
5. おわりのあいさつ	Ｔ１・Ｔ２：本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

８．評　価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

リトミックあそび指導案

9：15 ～ 10：00　於：そら組保育室

指導者　神　山　祐　希
磯　沼　美　紀

1．年　齢：4 歳児（そら・もり組　選択制）

2．あそび設定の視点：一人ひとりの想像力を豊かにする表現活動

3．主　題：イメージの世界を楽しもう！～タイムマシーンに乗って出発だ!!～

4．主題について

園生活の中で子どもたちは、お母さんやお姫様、ヒーローや恐竜などになったり、空き箱で作ったものをいろいろな物に見立てて遊んだり、ごっこあそびを中心に、イメージを膨らませながら遊ぶことが大好きである。今回は、タイムマシーンに乗って色々な時代へ旅をしながら、色々なものになりきって、表現活動を楽しんでいこうと思う。

5．園児の様子

新年度がスタートして 2 か月が過ぎ、新しい環境にもだいぶ慣れてきた様子がみられている。自由あそびでは、自分の好きなあそびを見つけ、友だちと関わりながらじっくりと遊ぶこともできるようになってきた。リトミックあそびにおいては、音をよく聴きながら友だちと一緒にイメージを膨らませ表現を楽しめるようになった。

6．本時のねらい

音を聴いて、イメージを広げながら自分の思った動きをのびのびと表現できるよう、またその中で即時反応、模唱、音の高低、聞き分けなどを体験していく。

7．本時の指導過程

＊最初に 2 つ（リトミックあそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9：00 ～ 9：10　　場所：そら組保育室

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
～準備：はだし・円になる～	○空間を広く使えるよう、環境を整える。 ＊Ｔ1：全体を通してピアノをベースに活動を進めていく。 ＊Ｔ2：子どもたちと一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。
1. リトミックあそびのうた・あいさつ	○これからリトミックあそびを始める意識を持たせるようにする。
2. 模唱（お返事ハイ） 『○○くん』→『はあい』	○出席確認及び本日の健康状態把握として、一人ひとりの子どもに呼びかけ、きちんと音に合わせて答えられるよう配慮する。

3. ウォーミングアップ 「♩」…歩く　「𝅗𝅥」…ゆっくり歩く 「♪」…かけ足 〈合図〉 ☆高い音 …… 頭の上で手をたたく ☆低い音 …… しゃがんで床をたたく ☆高低同時 … 片手を上にもう片手は床をたたく ☆リズム“♪♩♪♪♩♩|。＞” …… アクセントで手をたたく ☆呼びかけ“♬♬♩𝄾” …… 友だちを見つけて握手する	＊Ｔ１：即時反応の合図を明確に子どもたちにわかり易いように伝える。 ＊Ｔ１：子どもたちの動きを見て、合図のタイミングを工夫する。 ＊Ｔ２：なかなか取り組めない子どもがいたら、励ましたり、一緒に行う。 ＊Ｔ２：反応の速い子どもを認めていく。 ＊Ｔ１：速さを変えていき、タイミングをつかませるようにする。 ○友だちは何人でもよいという指示をする。
4. 模唱♪朝は何を食べたの？	＊Ｔ１：子どもたちの発表意欲を尊重していく。
5. 自由表現 「タイムマシーンに乗って出発だ!!」 出発！ 【リズム打ち】 ～タイムマシーンを動かすための呪文をみんなで唱えよう～	＊Ｔ１：子どもたちのイメージを取り入れながら話を進める。 ○子どもたちの意見を取り入れながら、わかりやすいリズムをつけていく。
サムライの世界に到着 【音の聞き分け】 ● サムライ→男の子 ● お姫様→女の子	＊Ｔ１：それぞれの表現を伸び伸びとできるよう、そしてそれを認めていく。 ＊Ｔ２：表現が引き出せるように援助していく。
恐竜の世界に到着 【音の聞き分け】 …草食恐竜になり、いろいろな即時反応を行う。 ● STOP →吠える ● 高低→葉っぱを食べる ● 肉食恐竜の足音→石になる	＊Ｔ１：聞き分けをわかりやすいように音をつけていく。 ＊Ｔ２：空間を広く使えるよう声かけをする。

未来の世界に到着 【模唱】 ♪どんなお仕事してるかな？ 【リズムの聞き分け】 ● ♩→ ● ♩→ ● ♫→ 元の世界へ！ 6. 終わりのあいさつ	＊Ｔ１：音の高さを手で正確に表せるようにしていく。 ＊Ｔ２：それぞれの表現を認めながら、イメージを広げていかれるようにしていく。 ○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

８．評　価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

体育あそび指導案

9：15 ～ 10：00　於：幼稚園ホール

指導者　佐　藤　憲　夫
伊　奈　恵　理

1．年　齢：4 歳児（そら組・もり組　選択制）

2．あそび設定の視点：一人ひとりの能力を伸ばす 2 人指導

3．主　題：マットを使ったゲームにチャレンジしよう！～島渡りゲームに挑戦！～

4．主題について

本時は、最初のウォーミングアップでは「クマさん歩き」や「カエルさん歩き」、そして「フラミンゴ歩き（片足ケンケン）」の動きづくりの練習を行った後、マットを島に置き換えて、『島渡りゲーム』として、色々な動きを制限し、身体を使う部分を少しずつ変化しながら、基礎感覚で必要な腕支持感覚・跳躍力・バランス感覚を楽しく発展させ、高めていきたい。

5．園児の様子

身体を動かして遊ぶことが大好きなそら組、もり組の子どもたち。自由あそびでも体いっぱい使って遊んでいる。選択制が始まった体育あそびもたくさんの子どもが自ら選んで楽しんでいる。遊ぶ中で鉄棒や雲梯にも挑戦し、腕の力もついてきた。また、鬼ごっこあそびも色々な種類できるようになり、遊びの幅が広がっている。

6．本時のねらい

- 色々な動き（動物歩きや片足ケンケン）をしながら、基礎感覚（腕支持感覚・跳躍力・バランス感覚）を養うようにする。
- やり方などのルールを理解しながら、楽しくゲームを行えるようにする。

7．本時の指導過程

＊最初に 2 つ（リトミックあそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

9：00 ～ 9：10　場所：そら組

園児の活動	指導上の留意点
1.　整列 ● クラスごとに整列させる。 2.　準備体操 ● 体をあたため、これからの活動が十分に行えるように準備体操をする。	● 教師の動きを見ながら、元気よく体操を行えるようにする。 ～指導者の動き～ T（指導者）1：子どもたちの前で見本を示す。 T 2：巡回しながら一人一人の様子を見る。

3. 挨拶	● 整列させて元気よく挨拶ができるようにする
4. 本時の内容と説明	● 本時の予定と注意事項を説明する。 ～指導者の動き～ Ｔ１・Ｔ２：うまくできない子どもには補助しながら励ましの言葉をかけていく。
5. ウォーミング・アップ（基本動作の確認） １）クマさん歩き ２）カエルさん歩き ３）片足ケンケン（各左右１回ずつ）	
6. **島渡りゲームⅠ**（マットを島に置き換えたゲーム） ルール：島から島へクマさん歩きで移動。 ※ルールを守って鬼（指導者）に捕まらないようにクマさん歩きで移動できるように指導する。	● マット多数準備 ～指導者の動き～ Ｔ１：子どもたちの前で見本を示しながら、リードしていく。 Ｔ２：子どもたちを補助しつつ、一人ひとりの活動を認めながら、励ましの言葉をかけていく。
7. **島渡りゲームⅡ**（マットを島に置き換えたゲーム） ルール：島から島へカエルさん歩きで移動。 ※ルールを守って鬼（指導者）に捕まらないようにカエルさん歩きで移動できるように指導する。	
8. **島渡りゲームⅢ**（マットを島に置き換えたゲーム） ルール：島から島へ片足ケンケンで移動。 ※ルールを守って鬼（指導者）に捕まらないように片足ケンケンで移動できるように指導する。	
9. 整理体操	
10. 整列・挨拶・まとめ	● 本時のまとめと次回の活動について話し、期待を持たせるようにする。

８．評　価

・色々なゲームに興味を持って、楽しく取り組めたか。

主に、一人ひとりの取り組み姿勢や反応などを複数の指導者で確認しながら評価していく。

知能あそび指導案

9：15 ～ 10：00　於：やま組保育室

指導者　**大　島　比査子**
永　坂　圭　子

1．年　齢：5 歳児（つき組）

2．あそび設定の視点：推理する楽しさを育む指導

3．教材名：色パズル

4．本時刺激される知能因子：記号で単位を集中思考する（NSU）

5．本時のねらい

空欄部分に入る色を推理していく色パズルを完成することにより、記号で単位を集中思考する能力を育てる。

6．教材について

知能あそびでは、子どもたちの知的好奇心を刺激しながら、パズル、クイズ、ゲームなどのあそびを通して、教えるのではなく自分で考える教材を用意して活動している。

子どもたちは、毎回どんなことをするのかを楽しみに、一度取り組むと夢中で進めていたりゲームなどは友達と楽しみながら考えている。中でもパズル形式は人気の１つでもあり本時は挑戦意欲も旺盛な、色を素材にしたパズルを用意した。

１色から３色（赤、青、黄色）が並んだピース（ ■□■ □■■ など）をパズル台紙と同じ色のところにクロスさせながらのせていくのである。色ピースは向きが特定できないので色の順番を見通しを立てながら、柔軟に考えていくことが、ポイントになる。またクロスする部分はピースとピースが重なることになるので、全てのピースをのせるにはどのように置くのか、気づいて欲しいと思う。ピースの重ね方の理解ができたら、次に部分的に空欄のあるパズル台紙に取り組む。問題Ａは６ピース、Ｂは９ピースで空欄の所に何色が入るかを推理して完成させるのである。空欄が多くなるほど、ピースの黄色の部分が少なくなっているので、黄色の位置がヒントの鍵となる。あらゆる可能な置き方を考え、全てのピースを置ける唯一の方法を導き出すことが、今回のパズルの面白さである。パズルが得意な子、苦手な子など反応はそれぞれだと思われるが、思考の柔軟性も問われる内容でもあるので、躓いた時に自分の力で工夫して考えられるよう指導に心掛けていきたい。そして今回の教材を通して推理して考えることの楽しさを味わって欲しいと思う。

7．園児の様子

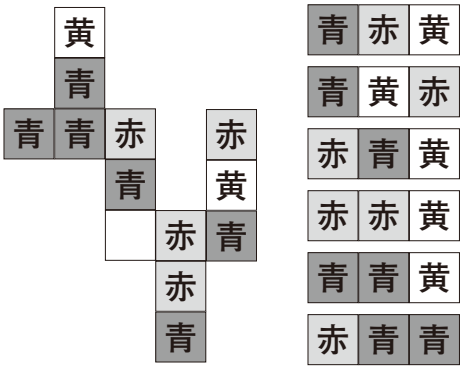
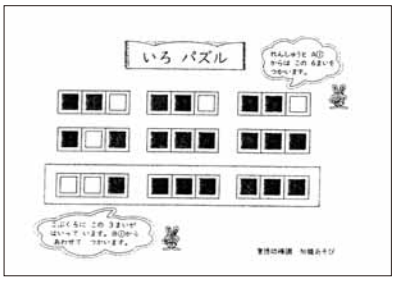
年長になって挑戦意欲も旺盛になり、子どもたちは毎回活き活きと課題に取り組んでいる。

これまでに行った課題の中から「スリーヒントクイズ」では答えを当てた時に、満面の笑顔で「やった！」と喜んでいた。また数の大小を比べっこするをカードゲームや七並べのゲームでは友達と一緒に考える楽しさからとても盛り上がって、プリントの教材では最後まで粘り強く取り組

み、「もっとやりたかった！」という声がたくさん上がった。そして持続して取り組む時間が長くなり、考えることの楽しさが伝わってくる瞬間がたくさんあった。

今回は子どもたちが初めて取り組むパズルだが、これまでの反応から意欲的に取り組んでくれることに期待をしている。時にはうまくいかないこともあるだろうが、挑戦する気持ちと気づきを大切に、じっくり考え完成させる達成感を味わって欲しいと思う。子どもたちが充実した時間を過ごせるように指導していきたい。

８．本時の指導過程

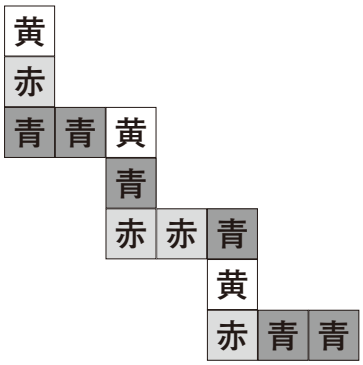
教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点等
1. 始まりのあいさつをし、出席確認をする。	●出席確認して、本日の健康状態等を把握する。
2. 全員で集まってすわり、説明を聞いてやり方を理解する。 【説明用パズル】 【説明用ピース】  	Ｔ１（指導者）： ●説明用のパズルとピースを提示して、どのようにのせると完成できるか？気づきを大切に、子どもたちと一緒に考え、意見を求めながら理解させる。 ●完成できたら、空欄に何色が入ったか確認する。 ●進め方やピースの取り扱いについて、説明する。 Ｔ２： ●子どもたちがやり方を理解しているか、一人ひとりの反応と様子を見る。
3. 椅子を出してそれぞれの席につく。  	Ｔ２： ●４人のグループになって、それぞれの席につくように指示する。 Ｔ１： ●パズルピースとパズル台紙の冊子を配る。

4. 練習問題（2 題）に取り組む。

【れんしゅう　2 題】

• ピース 6

れんしゅう 1



Ｔ１・Ｔ２：

• ピース（6 枚）の色の並び方をよく見て、同じ色のところにぴったり置けているか確認する。

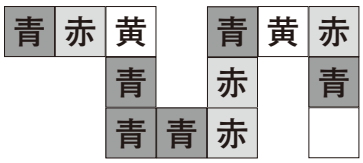
• ピースの向きなどで、苦労する子には自分で気づけるように促す。

• できたら進度表にシールを貼って、進めさせていく。

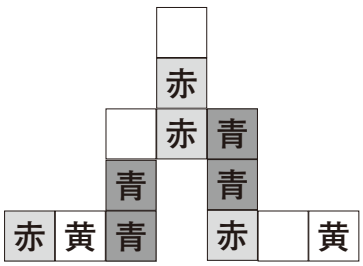
5. パズルＡに取り組む。

【パズルＡ　6 題】

①



②

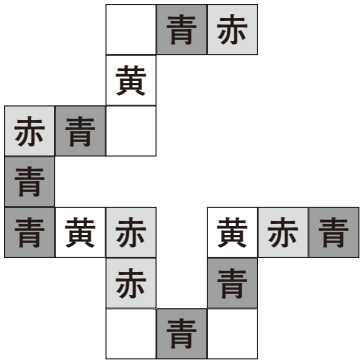
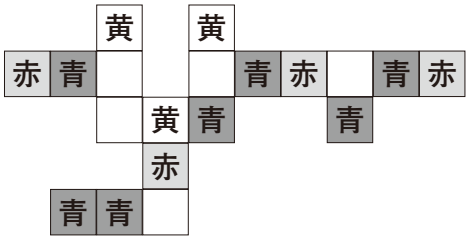


Ｔ１・Ｔ２：

• パズルＡに進むことを指示する。

• 空欄に当てはまる色を、正しく導き出せているか確認する。

• 空欄が増えていき、確実に当てはまるピースが少なくなることで、柔軟に推理して取り組めているかを留意して、声を掛けていく。

6. パズルＢに取り組む。 【パズルＢ　６題】 ● 加える３枚のピース ②  ③  	Ｔ１・Ｔ２： ● パズルＢに進ませ、小袋に入っている３ピースを加え、９枚で完成させることを指示する。 ● 空欄が増えていくので、あらゆる可能な置き方を考え、全てのピースを置ける唯一の方法を導き出せるように留意する。 ● 黄色の部分が少ないことから、黄色の位置がヒントの鍵となるので、気づかせていく。
7. 片付け ● パズルピースと台紙を所定の場所に片付ける。 ● 終わりのあいさつをする	Ｔ１・Ｔ２： ● 片付けの手順を指示する。 ● 片付けが速やかに行えるように対応する。 ● 本時のまとめをし、終わりのあいさつをする。

９．評　価

活動後、本時を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みや反応、理解度など指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかをまとめて今後の実践に活かしていく。

造形あそび指導案

9：15～10：00　於：つき組保育室

指導者　**飯　濵　久美子**
高　井　正　恵

1．年　齢：5歳児（やま組）

2．あそび設定の視点：見通す力を育む造形指導

3．主　題：「ビー玉ゲーム」～木片を組み合わせて作ろう～

4．主題について

聖徳幼稚園の造形あそびは、造形あそびを通して、豊かな感性を育み、創造性を育てることが第一目標である。造形あそびの中で、いろいろな素材に触れながら、「切る」「貼る」「描く」「つくる」「つなぐ」「共同制作」などのねらいを持った内容を指導者が吟味し、子どもに教材を与えている。今回は1学期ということもあり、木工あそびに繋がる前段階とし、木板にさまざまな形の木片を構成して、ゲームを作るという活動を考えた。この活動により、空間の中にどのようにビー玉の通る道を作るかをイメージし、考えさせることにより、見通す力を育てていきたい。

5．園児の様子

進級やクラス替えなどの新しい環境から2か月経ち、子ども達は落ち着いてきている。自由あそびでは、レゴを使って、乗り物や家などを作ったり、あそびに必要なものを、自分で空き箱や紙などを使って作る姿が見られる。また、友だちとオセロや将棋などのゲームをしたり、ジェンガを順番に積み重ねたりしてあそぶ姿も見られる。年長組の造形あそびでは、自分で考えたことを、いろいろな素材を使って表現しようとすることが重点目標であり、生活の中でも、自分で工夫してあそべるように環境を整えている。

6．本時のねらい

木板にさまざまな形の木片を構成し、見通す力を育てる。

7．材　料

- 木板　• 木片　• 木工ボンド　• ボンド用スプーン　• ビー玉　他
- 発展材料　（マーカー　シール　ペットボトルキャップ）

8．本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	
2. 本時の内容の説明を聞く。	T（指導者）1：本時の活動内容に期待が持てるように説明する。
3. 木板とビー玉をもらう。	T 1・T 2：木板、ビー玉を配る。
4. 木板にビー玉が通る道をどのように作るか木片を置いてみる。	T 1・T 2：子ども達の考えや意見を、ひろいあげ、みんなに示す。 また、考えがまとまらない子どもには個別に声をかけながら援助していく。
5. 木板に木工ボンドで木片をつける。	T 1：ボンドの使い方を説明する。 T 2：机間巡視して扱い方が難しい子どもを援助する。
6. マーカーやキャップなどを使ってみる。	T 1：さらにゲームとして発展できるような材料を提示する。
7. 鑑賞する。	T 1・T 2：子ども達と作品を鑑賞する。
8. 終わりの挨拶をする。	T 1・T 2：次回の造形あそびに期待が持てるように言葉がけをする。

9．評　価

子どもたちが意欲的にテーマに取り組み、工夫して作ることができたかを指導者間で確認し、評価していく。

小 学 校 の 部

知能訓練指導案

9：20～10：20　於：つばさ組教室

指導者　**地　挽　裕　子**
長谷川　眞　子

1．クラス名：つばさ組（1年生）
男子23名　女子10名　計33名　聖徳式（個人）平均IQ 147.6

2．授業設定の視点：パズルを通して推理力を育てる指導

3．教　　材：線路図の完成

4．本時刺激される知能因子：図形で見通しを集中思考する（NFI）

5．本時のねらい

いくつかに切り離されたカードを使って、線の特徴から全体のつながりを見通し、道や線路図を完成することにより、図形で見通しを集中思考する力を育てる。

6．教材について

子どもに人気な玩具のひとつに“プラレール（タカラトミー社）”がある。色々な特徴の線路を工夫してレイアウトを考えるのはとても楽しいものである。レールにはまっすぐなものと曲線のものもあるが、何も考えずにただつなげていったら線路が行き止まりで電車が脱線してしまう。電車が止まることなく元の場所に戻って走り続けられるレイアウトにするには、先を見通し、その場所にどのレールが1番適しているかを考える（図形の判断力）ことが必要になる。本時に取り組む『路線図の完成』はその線路つなぎをパズルにした形に近い。

本時の取り組む『路線図の完成』は、ひとまとまりの道（線）を表した図（道）を4～20のマス目で切断したカードを使って元通りの道（線）が完成するようにカードを並べていく課題である。台紙の上に1枚から6枚カードの場所が指定されているので、児童はそれを手がかりにしてカードをつなげて元通りの道（線）になる様にカードをつなげていく。すべての道がつながるようにするには、いい加減にカードを並べてもつながらないので、児童は自分のカードの道（線）の太さや本数などの特徴も見ながら、どのカードをどのような向きでつなげていくか見通しを立てながら考えていかなければならない。はじめは2×2の4マスから取り組むのでマス目も線の種類も少なくカードの色も手掛かりになるので見通しが立てやすいかもしれないが、段々とマス目の数も増えて道も複雑になり、カードの色も1色になるので、すんなりと見通しを立てて推理するのは困難なこともあるかも知れない。2人指導制を活かして児童たちの様子を観察し、思考が停滞している場合には助言を工夫して最後までやる気をもって取り組んで欲しい。

児童たちに人気のあるパズルという形式を盛り込んだこのパズルには、皆が興味を持って取り組んでくれることを期待している。問題を正確に捉えてパズルを構成していくためにはピースの向きや特徴を試行錯誤しながら考えていく柔軟性や推理力必要になってくる。どの児童も個々のペース

で時間一杯集中して取り組み持っている力を存分に発揮し、推理することの楽しさを十分に味わって欲しいと考えている。

7．クラスの実態と指導の観点

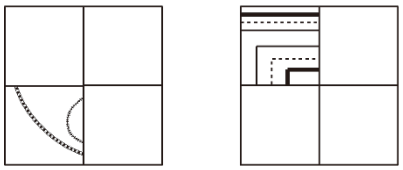
今年度入学したつばさ組ではまだ数回の知能訓練の授業を行ったのみではあるが、一斉の場で積極的に発言するなど、全体的には明るく活発な児童が多い。また、課題をこなしていくペースには進度差はあるものの、どの児童も考える事を楽しみながら取り組んでおり、課題に対する意欲も高い。このようなクラスの実態からも、個別に進めていく本時の『線路図の完成』では、自力で解決の糸口を見つけ出していくことを目標に、更に試行錯誤して考えることの楽しさを実感させたい。そのためにも、一斉の説明で、全員に十分理解させた上で、それぞれがスムーズに個別の活動に入れるように留意する。

《知能構造（クラス平均）のプロフィール》

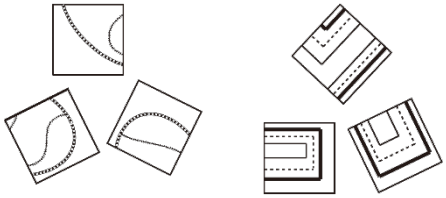
	IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
平均	147.6	150.5	146.0	146.0	142.5	161.0	140.4	143.7	150.4

本時に刺激する「図形」と「集中思考」の知能因子指数（FQ）は、他のFQと較べると若干高い指数を示している。集中思考の素材としてパズル形式を用いる中で、更に楽しんで取り組み、推理する力を伸ばしていきたいと考えている。

8．本時の指導過程

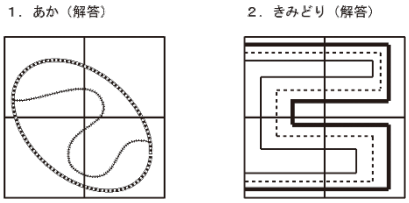
教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
1. 指導者の話を聞き、本時の内容を理解する。 • 黒板の提示を見て、「線路図の完成」の方法を理解する。 ① 台紙 台紙に色が指定されているので、色ごとに問題を完成させていく。 • 2×2マス　2題　• 2×3マス　4題 • 3×3マス　6題 1．あか　2．きみどり  ※冊子はAとBの2冊に分かれている。	• ピースの内容と台紙の書いてある提示を見せながら、教材の内容と進め方を説明する。 T（指導者）1：実物と例題を提示し、具体的に進め方のポイントを説明する。 T 2：机間巡視をしながら、子どもが説明に集中できているか確認する。また、追加説明した方が良い点などを押さえる。

② ピース
それぞれ２題ずつ、色違いのピースが１袋に入っている。（一人分ずつ、箱に入って用意してある。）



③ 進度表
できたら指導者に確認してもらい、進度表にシールを貼って次の問題を進める。

④ 完成見本
- 必要に応じて配布する。



2. 個別の活動を行う。
(1) 冊子Ａの問題を取り組む。
- 台紙、ピースを使って、それぞれのペースで課題に取り組む。

2. 教材を配布する。
Ｔ１・Ｔ２：進度表を配布し、記名を確認する。
Ｔ１・Ｔ２：冊子Ａの台紙とピースを配布する。

Ｔ１・Ｔ２：児童の取り組みの様子を見て必要に応じて確認または助言をする。
※個々の様子を見て、滞っている場合には段階に応じた助言をする。
Ｔ１・Ｔ２：児童の取り組みの様子によって、次の課題に進む頃合いを図り、スムーズに作業を切り替えられるようにする。

(2) 冊子Ｂの問題を取り組む。	Ｔ１・Ｔ２：冊子Ｂの台紙とピースを配布する。 Ｔ１・Ｔ２：できるだけ自分の力で完成できるように助言を工夫する。 Ｔ１・Ｔ２：どうしても行き詰っている子には、ピースを組み合わせ方や台紙につながるピースに着目していくように促していく。
3. 使用した用具を片付ける。	3. 片付けをする。 ●終わりの合図をし、用具の回収をする。
4. 終わりの挨拶をする。	4. 終わりの挨拶をしっかりするように促す。

９．評　価

授業後、本時を振り返り、児童一人ひとりの課題への取り組み反応（意欲・集中力・難易度）について指導者同士で確認をし、本時のねらいが達成できたかどうかを実践記録にまとめて、今後の実践に活かす。

数学科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：みずほ組教室

指導者　中　野　恵　子
杉　村　健　人

1．クラス名：みずほ組（1年生）

男子 23 名　女子 11 名　計 34 名　聖徳式（個人）平均 IQ 146.9

2．授業設定の視点：創造的知能の開発を目指した学習指導

3．授業の題目：テンズゲーム～ 10 の補数を考える～

4．題目について

本校の数学科では、『事象を数理的にとらえ、論理的に考え、統合的、発展的に考察し処理する能力と態度を育成する。』ことを目標として掲げ、さらに関数的な考え方の養成のために「数の合成・分解」を指導の重点としている。また、数学に対して児童が積極的に関わり、自分達の力で、問題を解決したり、新しい内容を導き出していけるような授業展開を心掛けている。

本時では、指導の重点である「数の合成・分解」をゲームという活動を通して、技能の習熟を図り、見通しを持って思考する能力を養う。繰り上がりのあるたし算や繰り下がりのあるひき算のポイントとなる「10 に対する補数」を考えながら、合成・分解を円滑に行えるようになることも重要であるが、同様に数の組み合わせを意識して、そこから新たな計算の仕方やその良さに気付こうとする姿勢も大切にしたいと考える。

5．クラスの実態

4 月に入学してから約 2 か月間、授業への構えや学習態度の確立に重点を置きつつ、数・足し算・引き算といった学習内容の理解、定着を行ってきた。授業への構えや学習態度の確立は、まだ十分とは言えないが、一生懸命考え、課題に対して粘り強く取り組む姿勢が出来てきている。本クラスの児童は一人ひとりが好奇心旺盛でやりたいことがあるとすぐに行動に移してしまう傾向にある。その点を受けて、個々の実態に応じてゲームを楽しめるように教材内容や授業展開を工夫していく。また児童によっては、ルールを理解するために時間を要することがあるが、2 人担任制を活かして個々に対応し、すべての児童がゲームを楽しみながら学習内容を深めることが出来るようにする。

下記の表は、本クラスの IQ（知能指数）と FQ（知能因子指数）の平均である。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
147.1	156.5	143.2	141.8	141.4	159.4	140.8	146.4	147.6

みずほ組（1年生）

6．指導時間と内容（30 校時）

- 20 までの数の概念 …… 14 校時
- なんばんめ…… 3 校時
- 数の合成・分解…… 6 校時
- 和が 10 までのたし算 …… 3 校時
- 差が 9 までのひき算…… 3 校時
- まとめとたしかめ…… 1 校時

上記の流れで、4 月～ 5 月にかけて授業を行った。

7．本時のねらい

10 に対する補数を意識させ、合成・分解を円滑に行いながら、見通しを持って思考する力を育てる。

8．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点及び留意点
(1) 合わせて 10 になる 2 つの数の組み合わせを考えさせる。 ゲームの方法とルールについて理解させる。	(1) 自分のカードを使い、足して 10 になる 2 つの数の組み合わせを活動を通して考えていく。 ゲームの説明をしっかりと聴き、わからない点を質問する。	(1) 初めに個別に作業をすることにより、各々の理解の状況を確認する。 ゲームの説明は、できるだけわかりやすく短時間で行う。T1 がゲームの説明をする際に、T2 が対戦相手の役となり、子ども達にわかりやすい説明となるようにする。T2 は、ゲームが始まった際に、全員が内容を理解できるよう個別に対応する。
(2) ゲームを楽しみながら、10 に対する補数の理解を深めさせる。	(2) ルールを守ってゲームを行う。	(2) 全員がルールを守って楽しくゲームに参加しているかに気を配る。ルールの理解が不十分な児童や補数を見つけるのに苦労している児童に対して、個別に対応し、適切に助言していく。 T1、T2 で連携を取り合いながら全ての児童の様子を把握し、対応していく。

	（ゲームのルール） ●2人1組 ●10に対する補数を考えながら、交互に手持ちのカードを置いていく。 ●手持ちのカードが先に無くなった方の勝ち。 ※状況によっては、ルールに以下の内容をつけ加える。 ●自分のカードの隣には置けない。 （必ず相手のカードに接するように自分のカードを置く）	
(3) 工夫してカードを置いていく方法について全体で考えさせる。	(3) 手持ちのカードを先に無くすための方法などを発表する。	(3) T1が全体での議論を進めている間、T2は個々の様子に気を配り、必要に応じて声かけを行っていく。

理科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：情報室

指導者　**米　持　　勇**

1．クラス名：あさぎり組（2年生）

男子 21 名　女子 11 名　計 32 名　聖徳式（個人）平均 IQ 139.2

2．授業設定の視点：かげのでき方を考察し創造的知能の開発と育成を目指した学習指導

3．主　　題：光とかげ ～光の当たり方とかげのでき方～

4．主題について

本校理科の教育課程では、2 ～ 3 年生において創意性・拡散思考・評価力を主として知能開発し、4 ～ 6 年生において獲得した知能を活用させて総合的に考える力を養い、理科的な考え方の能力を育成するようにしている。そのため、2 年生では理科的な遊びを通して学ばせたり、諸感覚を働かせて自然の事物・現象の特徴や変化に気づかせるように指導している。この主題は、本校 2 年生で学習する「日なたと日かげ」という単元で地面の明るさや温度など比べて違いがあることや植物の成長のちがいに気が付かせる学習の発展内容として扱う。光源をどの位置にするとどんなかげがどんな位置にできるのかということを学び取ることにねらいを置いている。例として晴れた日に校庭でかげ踏み鬼の遊びを通して、子どもたちにかげのできる向きや長さの変化を気が付かせることができるが、今回は室内で三次元空間の好きな場所から対象物に光を当てて、二次元空間である平面にできるかげのでき方を調べる作業を、遊び感覚で取り組ませ、光源の位置とかげのでき方の関係に気付かせたい。今後、5 年生で学習する「光」や「太陽の動き」の単元で光の進み方や太陽高度、太陽の動きなどにつながる内容となるが、かげの濃さや光の直進性や時間または季節が経過すると日かげの位置が変わることにも関連付けて考えられることも期待している。

5．クラスの実態

本校では 2 年生より理科を指導している。1 年生の時から理科の授業を心待ちにしていて、期待感を強く感じる。自然に対する興味関心も高く、積極的に自然にはたらきかけて自然の事物現象の特徴や変化に気がつく子が多い。例年 2 年生を対象に取り組んでいる「自然のたより」という自然観察のための自由ノートがある。週 1 回まとめて発行しているが、身近な疑問から継続観察まで幅広く、興味関心の高さを表している。楽しく活発に学習できる雰囲気があり、自分の考えを持ち発表できる児童が多い。疑問に対しても教えられるのではなく、自分たちで調べていきたいという姿勢が強く、そのため実験観察に対しても関心が高い。本クラスの IQ および FQ（知能因子指数）の平均は以下のとおりである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
139.2	143.5	136.3	138.2	130.5	144.8	138.3	142.7	139.8

6．指導計画（3時間扱い）

（1）日なたと日かげのちがい……1校時
（2）光の当たり方とかげのでき方……1校時（本時）
（3）光とかげの関係……1校時

7．本時のねらい

かげが光源に対し対象物の反対側にできることと光源と対象物との角度によってかげの長さが変化することを体験を通して学び取らせる。

8．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点および留意点
1. 光がものに当たってかげができることを理解する。	○かげができるには何が必要か考える。	○教室の明るさにも注目させる。
ものに光をあてたら、かげはどこにできるか		
2. かげが光源に対し対象物の反対側にできることを実験から学び取らせる。	○対象物に光を当てて、かげがどの位置にできるか確認する。	○制限は最小限に止め、自由に実験ができるように配慮する。
長いかげ、短いかげをつくってみよう		
3. 光源と対象物との角度によってかげの長さが変化することを実験から学び取らせる。	○対象物にいろいろな距離や角度で光を当てて、かげにどのような変化があるか確認する。	○光源の位置とかげのでき方の関係に気付くような働きかけをする。 ○かげの濃さについても気が付く児童いれば内容にふれる。
4. 発表した意見をまとめ、かげのできる条件やしくみについて意見交換させる。	○確認したこと・発見したことを発表し合い、ノートに記録する。	○無理に規則性をまとめようとせず、発見したことをお互いに報告し合うことに重きを置く。

リーダーインミー学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：しらさぎ組教室

指導者　**渡　辺　泰　介**

1．クラス名：しらさぎ組（2年生）

男子 20 名　女子 11 名　計 31 名　聖徳式（個人）平均 IQ 140.7

2．授業設定の視点：一人ひとりが自らの考えを深められる学習指導

3．授業の題目：『幸せになるルール』

4．目　　標：「幸せ」というテーマで、各児童が考えを深める

5．授業設定の理由

(1) 教材観・指導観

本校では一昨年の 2 学期から道徳教育の一環として、スティーブンン・R・コヴィー氏のベストセラー『7 つの習慣』をベースにしたプログラム「リーダー・イン・ミー」を全学年で導入している。通常は隔週で約 20 分という短時間ではあるが、細かく設定されたテーマに従ってクラス担任がそれぞれの切り口で行なう授業に、児童も概ね意欲的に取り組んでいる。

リーダーシップ教育と聞くと、指導者の育成やエリート教育のような印象を持たれるかもしれないが、このプログラムが目指しているものは、「自分の中にリーダー、つまり指針をもつ」ということである。自分の生き方を自ら決め、自立し、自分の選択や行動に責任を持つ。前向きに考え、目的を実現するための自制心を持つ。そのような成長を児童に促していくための授業である。結果としてそのような成長の先には、他者に対してもリーダーシップを発揮できる人物がイメージできる。

今回のテーマは教科書にある「幸せになるルール」であるが、授業ではルール（があるとすれば）を考えることは最後にし、その前提となる「幸せとは？」について考えさせたい。とても広い意味を持つ言葉だけに、2 年生の児童がどれだけのことを考えられるかという不安もあるが、逆に低学年だからこそ表現できる素直な言葉にも注目したい。通常の授業だけでなく、クラス活動（週 1 時間）の時間を使いながら、児童一人ひとりがより考えを深められるように工夫していきたい。

(2) クラスの実態・児童観

昨年度からの持ち上がりのクラスである。挙手や発言の量には差があるものの、どの子もこの授業に対しては前向きである。おそらくそれは、数学や国語といった教科とは違う感覚を持っているからと考えられる。クラスで考え合い、意見を出し合うという活動がメインであることからも、他教科では見られない児童の姿が見られることは、担任として大変興味深い。

今回のテーマである「幸せ」という概念について、言葉としては知っていても、意識して考えたことのある児童は少ないと考えられる。本時に至るまでのプロセスをふまえて、2 年生の感覚を表現させたい。は通常の授業では、話し合いを深め合う時間が足りないのが実情だが、今回は 60 分という設定である。児童一人ひとりが、自分なりの考えを表現できるように促し、待つことで、クラスとして深め合っていければと考える。

【知能構造のプロフィール―クラス平均―】

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
140.7	144.3	139.4	138.5	134.2	144.2	138.1	145.8	141.0

6．指導計画

○ミニ・ディベート「動物園の動物と野生の動物、どちらが幸せか」…… クラス活動

○「幸せってどんな時？」アンケート実施。…… クラス活動

○「幸せになるルール」について考える。…… 本時

7．本時の目標

「幸せ」という概念について、それぞれの児童が考えを深め、「幸せになるルール」を考える。

8．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点および留意点
	●授業開始の挨拶をする。	●授業の構えをつくる。
① 前時までの振り返り	○「幸せ」という言葉について、意識を向けて考える。（辞書にある記述も紹介する）	○本時に至るまでに考えてきた「幸せ」について自分なりのイメージを持たせる。
② 各児童の発表	○事前に実施したアンケートをもとに特徴的な意見を選択して表現させる。 また、それに対して質問や意見を出させる。	○発表児童が偏らないように、配慮する。 話し合いが活発に行われるように、促していく。
③「幸せでない状態」とは？	○話し合いを活性化させる意味で、あえて「幸せでない状態」とはどんな時かを考えさせる。	○意見が様々な方向に分散しないように注意する。
④「幸せになるルール」とは？	○話し合いを振り返りながら、自分なりの考えをまとめ、もし「幸せになるルール」があるとすれば、それはどんなものか、考えさせ、発表させる。 ●授業終了の挨拶をする。	○「ルール」ということに固執しないように自由に考えさせる。

9．評　　価

各児童が、2年生なりに「幸せ」という概念について考えを深められたか。

知能訓練学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：ほくと組教室

指導者　**松　尾　由　香**
長谷川　和　暉

1．クラス名：あさま・ほくとA組（3年生）
男子 16 名　女子 14 名　計 30 名　聖徳式　（個人）平均 IQ 163.4

2．教材設定の視点：ゲームに勝つための判断力育成を目指した指導

3．教材：熟語ポーカーゲーム～熟語をたくさん作って高得点をねらおう～

4．本時刺激される知能因子：概念で分類を評価する（EMC）

5．本時のねらい

漢字カードを組み合わせ、柔軟に熟語を思いつくと共にできるだけ高得点になるようなカードの分類を判断することにより、概念で分類を評価する能力を育てる。

6．教材について

漢字は、知能訓練の中でも色々な素材として扱われてきた。図形の領域では部首や編作りでの共通部分の発見や記憶、字の構成の思いつき、またいくつかの部首を組み合わせてできる漢字の思いつき等をこれまでも行ってきた。記号の領域では 2 字熟語の読み方で点数化し、高得点をねらうゲームもある。今回は概念の領域で漢字を扱い、更に児童の好きなゲーム形式でできないかと考え、行きついたのが「熟語ポーカーゲーム」である。

ここでは 6 枚の手札となる漢字カードを組み合わせて熟語を作っていく。2 字熟語を 1 組作れれば勝ち、とすると児童は満足してしまう傾向がある。今回はAクラスでもあるので、ポーカーゲームの形式を取り入れ、完成した熟語によって点数化することで勝敗を決める方式にした。

作成するにあたり、ポイントは 3 つあると考えた。

1 つ目に、「勝つための判断力育成」をさせるには、カードの運不運で終わらせるのではなく、その場その場で最適な判断をさせるチャンスがあった方がよい。そこで、本来のポーカーゲームではない「場札」を設定することにした。場札 6 枚の中から 1 回に付きほしい枚数分交換ができる。極端な話、6 枚全部を取り換えても構わない。交換したくない場合はパスをしてもよい。交換する回数は 3 回までとした。交換回数を制限することで、1 回 1 回の交換チャンスをしっかりと見て考える。1 回戦の時間がコンパクトになる分、何回戦も実施することが可能になる。1 回戦だけだと、最初は気付かなかったことも、繰り返し対戦することで「勝つためにはどうしたらよいか」を考える余裕に繋がり、気付くチャンスも広がる。これは、これまでゲーム形式の課題を何回も実践してきて実感するところである。

2 つ目に、得点表の設定である。ポーカーゲームの配点を参考にして以下のように設定した。

ワンペア（2字熟語）…… 10点
ツゥペア（2字熟語が2組）……10 × 2 = 20点
スリーペア（2字熟語が3組）……10 × 3 = 30点
スリーカード（3字熟語）…… 30点
フォーカード（4字熟語）…… 80点
ファイブカード（5字熟語）……100点
ロイヤルストレートフラッシュ （シックスカード＝6字熟語）……200点

4字熟語以上は成立するには難しい部分もあるが、2字熟語は成立しやすい。2字熟語と3字熟語を比べた時、2字熟語を3組作れた時と3字熟語が1組できた時の得点は同じになる。何回戦も実践する中でどちらが有利なのか、気付けるとよい。

3つ目は、どのような漢字を準備するか。今回は、四字熟語は勿論、五字、六字と幅を広げられるように思案した。

使用漢字を選ぶ基準は次のようにした。

① 四字熟語になる確率の高い漢字
② 複合語になる可能性のある漢字
③ 反対語になる漢字

評価力をはたらかせることにより、より有利な課題になっている。更に、友達とのコミュニケーションも重要になる。自分の札のことばかりではなく、相手が何を捨てて何を選んだか、動きを観察することができれば、チャンスを広げていくことは可能だ。

児童が意欲的に取り組むに教材にするには、易しすぎず難しすぎずの適切な難易度が必要である。まだまだ発展途上の教材だが、児童が積極的に活きいきと取り組む姿を期待している。

7．クラスの実態と指導の観点

本クラスのIQとFQ（知能因子指数）の平均は以下の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
163.4	170.6	155.6	164.0	160.2	160.8	165.5	175.8	154.8

一見するとおとなしい印象なのだが、時間が経つと元気で活発な児童が多いことが分かった。実は好奇心旺盛で、それぞれに興味関心のある分野になると熱心に語ってくれる。課題においては、後半の難問に差し掛かっても助言をもらいつつも最後まで何とかして解決しようと粘り強く思考している。概念の見通し力の課題では会話や場面絵等からその順番や順位等を考える問題を実施したが、一斉説明時には友達の意見をよく聞きながら活発な発言が交わされた。また、その後の個別の活動にも生かしていた。

本時に刺激する「評価」のはたらきの知能因子は他のFQと比べると最も指数が低いが、概念の領域の方はIQと比べてもさほど変わりない。本時は児童が大好きなゲームという課題を用いる中で評価の課題にも楽しんで取り組み、比較判断力を更に伸ばしていきたいと考えている。

8．本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点等
1. 指導者の話を聞き、本時の内容を理解する。 • 模擬カードによるシミュレーションを見て、ゲームの進め方、得点の付け方を理解する。 《熟語ポーカーゲーム》 ◇用意するもの • ゲームカード • 得点表 • 個別用記録用紙 ◇人数　3人 ◇勝敗の付け方 各自できた熟語を記録用紙に記入し、1番得点の高い人が勝ちとなる。 ◇ルール ①1人6枚ずつカードを配る。 ②残ったカードは、裏にして山札にしておく。 ③山札周りに表にしたカードを6枚広げる。 ④順番に手札と場札を交換する。 • 1回につき何枚でもよい。 • 各回に一度流すこともできる。 • 交換はしなくてもよい。 ⑤3周したらゲーム終了。 ⑥各自、できた熟語を記録用紙に記入し、最も得点の多い人が勝ち。 《使用漢字内容》 一　三　四　七　八　全　十　千　万 大　中　小　不　学　期　分　時　日 月　年　人　面　場　高　寒　温　天 地　本　最　本　水　心　身　体　自 他　品　正　通　左　右　上　下　生 力　気　会　…など	• T（指導者）1・T2：2人で模擬的にゲームを行い、具体的に分かりやすく説明する。 • どのように考えると高得点につながるのかを気づかせる。

《得点表》

ワンペア	10 点
ツゥペア	10 点× 2 ＝ 20 点
スリーペア	10 点× 3 ＝ 30 点
スリーカード	30 点
フォーカード	80 点
ファイブカード	100 点
ロイヤルストレートフラッシュ（シックスカード）	200 点

2. グループに分かれ、ゲームを行う。
- ゲームカード、得点表、個別用記録用紙を受け取る。
- 実際にゲームに入る前に、どんなカードがあるのか、各自で認知する。

- 1 回戦目：ルールの理解を深めることを中心に取り組む。高得点をねらうことを意識する。

- 2 回戦目以降：高得点をねらい取り組む。

解答例（評価により得点が変わるケース）

200 点	日本最高気温
80 点＋ 10 点	最高気温・日本
10 点× 3	日本・最高・気温

3. まとめ
- 高得点を取れた熟語を発表する。
- 本時の感想をまとめる。

- ゲームカード、得点表、記録用紙を配布し、ゲームに取り組ませる。

Ｔ１：ゲームカードと得点表を配布する。
Ｔ２：個別用記録用紙を配布する。

- Ｔ１・２：ゲームを理解してスムーズに行われているか観察し、適宜助言、指導する。
- Ｔ１・２：発音は合っていても違っている使い方に気をつけさせる。

- どんな熟語が高得点を取れたのか発表させる。
- 感想をまとめる。

9．評　価

授業後、児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について指導者同士で分析し、本時のねらいを達成できたかどうかを実践記録にまとめ、今後の実践に活かす。

知能訓練指導案

9：20 ～ 10：20　於：あさま組教室

指導者　富　永　理香子
歌　田　翔　真

1．クラス名：あさま・ほくとＢ組（3年生）
男子 13 名　女子 17 名　計 30 名　聖徳式（個人）平均 IQ 130.9

2．授業設定の視点：図形での転換力を活かした拡散思考を育てる指導

3．教　　材：紙帯シチヘンゲ～ 1cm 幅の紙帯を変身させよう～

4．本時刺激される知能因子：図形で転換を拡散思考する（DFT）

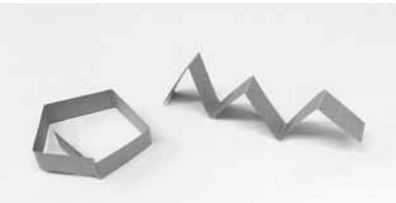
5．本時のねらい

1cm 幅の色画用紙帯を折る・曲げるなど工夫して、帯の形状を変形してまとまりのあるものを作ることにより、図形で転換を拡散思考する力を育てる。

6．教材について

子どもの頃、ちょうど 1cm幅の 10cm程の長さの棒状のお菓子があり、かじって短くなったものと折れてしまったものを並べて形や文字を作って遊びながら食べるのがとても好きだった。そんな経験から、何年か前に、棒状にきった工作用紙を 10 本与えて、「10 本を有効に使って何か作ってみよう」という教材を作ったことがある。この時の反応も、子どもの頃の私の様に、あれこれ動かしては首をひねりいろいろなものを想像して作り上げた。立体的に作られたバスケットゴールに感心した記憶がある。

今回の教材で素材として使用するのは、1cm幅、長さ 15cm に切った棒状の色画用紙である。前回使用した工作用紙よりも柔らかなので、児童の手でも簡単に折ったり曲げたりして加工が出来る。この紙帯を使って、図形での転換力を活かした思いつきをねらっているのが「紙帯シチヘンゲ」である。前述の工作用紙の教材は、10 本という制約の中で見通しを持って作ることをねらいとしていたが、今度は、幅や長さに制約のある紙帯をどんな風に加工して作りたいもののパーツに仕上げていくかをねらいとしたいと考えたのである。



色画用紙は折り紙よりもコシが強く、折り目がきれいにつく。また、丸めるとうずまき状になる弾力もある。一口に「折る」というが、帯を横に折るのか縦に折るのか、同じ方向に巻き込むよう

に折るのか山折り谷折り交互におるのか、それだけでも随分と違った形状を作ることが出来る。折る・曲げるだけで、紙に変化をつけることはそれだけでも楽しい活動となる。

さらに、紙を寝かせて使えば平面工作になり、折り上げるなどして立てて使えば立体工作につながる。平面での思考から抜け出して立体も考えられるようになることは、3年生という年齢を考えた時、大変意義を持つ。授業を通して、他の児童の考えや作品に触れることによって、まだ、そうした視点を持っていなかった児童のよい刺激となることも期待している。

7．クラスの実態と指導の観点

本クラスの児童のIQとFQ（知能因子指数）の平均は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
130.9	132.1	125.8	134.8	127.6	134.6	131.6	136.6	124.2

「知能訓練は、個々の発達段階にあった難易度の課題や授業展開で行われる程効果が高い。」という理由から本校の知能訓練の授業では、3年次より能力別クラス編成をとっている。このクラスの児童が、例年の3年生同様、それ以上に丁寧に課題に取り組み、大いに力を伸ばしてくれることを期待している。

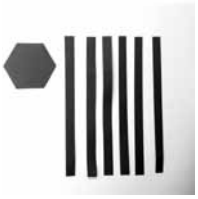
授業では、落ち着いた態度で課題に向かっており、発言も多い。いろいろな課題で得意な児童が素晴らしい力を発揮し、クラス全体の課題への意欲を盛り立ててくれている。

本時の課題のような個々に手を使いながらの思考活動は、とても楽しめるものであると思うので、はっきりと活動内容を理解させて取り組ませることと、1つの見方にとらわれてしまって行き詰まった時には、解法への手立てを自分で気づいていけるような助言をすることを心がけていきたい。

また、本校の知能訓練の2人指導制の利点を活かし、個々の実態をしっかりと把握し、一人一人が楽しみながら、ねらいに迫れるよう授業を進めていきたいと考えている。

8．本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点等
1. 本時の活動内容を知る。 「紙帯シチヘンゲ」 ○大判の指導者用紙帯 ○紙帯の約束 紙帯を切ったり、ちぎったりせずに 折ったり、曲げたりして まとまりのあるものを作る。 ○作品表：氏名と題名の記入欄 ○接着剤	○〈紙帯の約束〉を理解できているかどうか。 T（指導者）1：折る、曲げるとはどうする事か大判の紙帯を用いて、考えさせる。 T（指導者）2：机間巡視。集中して説明が聞けているか、活動内容を理解できているかを確認する。

2. 〈課題 1〉 紙帯 …… 4 本 円 …… 1 枚 ○個別に作成をする。 	○何を作りたいか、その為には紙帯をどんな風に折ったり曲げたりするとよいか、どんな工夫が考えられるかに留意させる。 T 1：机間巡視をして、再度、活動内容を理解しているか確認しながら、適宜助言する。 T 2：完成した児童の作品の記録を取る。
○完成した児童の作品を見て、その工夫を見つける。	○真似をするためでなく、工夫の仕方に気づかせる様にする。 ○行き詰まっている児童には、紙帯をいろいろ折らせたり、曲げさせて、出来た形から想像を拡げられるように言葉がけをする。
3. 〈課題 2〉 紙帯 …… 6 本 六角形 …… 1 枚 	○これまでやった〈課題 1〉の手順で、個別の課題に取り組ませる。
○〈課題 1〉が終わった児童が順次取り組む。	
4. 〈課題 3〉 ○〈課題 2〉が終わった児童が順次取り組む。	T 1：作品や道具などの片付けの指示をする。 ○紙帯の折り方や曲げ方に特徴のある作品を取り上げ、友だちの工夫した所を聴く
5. 作品の発表とまとめ • どんなふうに工夫をしたか。	○本時の内容についての児童の感想を聞き、課題内容が適切であったかの判断の資料とする。 • 楽しみながら試行錯誤できたか。 • それぞれが、取り組んだ結果に自信を持ち、今後に活かせる態度や思考のきっかけになったか。

9．評　　価

本時のねらいが達成できたかどうか分析し、児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について、指導者 2 人で実践記録にまとめて今後に活かす。

英語科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：のぞみ組教室

指導者　**小　島　早　織**

1．クラス名：のぞみⅠ組（4年生）

男子 14 名　女子 3 名　計 17 名　聖徳式（個人）平均 IQ 151.9

2．授業設定の視点

「一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習」

のぞみⅠ組の子どもたちは好奇心旺盛である。興味範囲の違いや能力差も多少存在するが、普段から幅広いものに興味関心を持って取り組むことができる。

本校の英語授業は、一人ひとりの能力や個性に応じるため、1 クラスを半分に分け、2 グループの少人数指導で行っている。授業では、「英語」という言語が秘めている、日本語で送る日常とは違う感覚を楽しみながら学んでほしいと考えている。そのために意識していることは、以下 4 点である。

① 課題の難易度 …… 課題を目にした時に、「出来るか分からない」という不安を覚えたとしても、自分の努力で最終的に出来るようになる課題を設定し、達成感を味わわせる。

② テンポ感 …… 多岐にわたる教材をテンポよくインプットし、また英語 4 技能をテンポよく反復練習することで、授業のはじめから終わりまで集中して学習できる場を作っていく。

③ 正しい発音の再現 …… 高学年から、ネイティヴによる授業が始まる。これに備えて、英語特有の「音の高低」「音素の分解」を児童が敏感に捉えられるよう働きかける。

④ コミュニケーション …「相手の目を見て会話する」「話をしている人のほうを向き、しっかりと話を聞く」といったコミュニケーションの基本を抑えて学習することで、「英語を使っている」という感覚を大切にできるよう働きかける。

3．授業のテーマ：“Let’s Enjoy English Camp !”

4．テーマについて

今回のテーマは、1 ～ 3 年生で学習してきた内容を総復習すると共に、この夏に行われるイングリッシュキャンプに向け、準備・練習を行うものである。イングリッシュキャンプとは、2 泊 3 日の英語の体験学習であり、少人数の児童グループにネイティヴの先生が 1 人付き、丸々 3 日間英語を実践体験するものである。成田空港近くのホテルに滞在し、宿泊している航空会社のキャビンアテンダントやパイロットの方を夕食に招待したり、成田空港に行き出国前の外国人の方にインタビューも行ったりする。これらの活動を通して、実際に英語を使って人と通じ合う難しさ、悔しさ、楽しさ、面白さ等を子どもたちに肌で感じ取ってもらい、今後の英語学習につなげてほしいと考えている。また、希望児童はその後オーストラリアの現地校とホームステイ体験のプログラムに参加できるので、イングリッシュキャンプで身につけた英語力とチャレンジ精神が現地でも活きてくることを期待している。

のぞみⅠ組（4年生）

5．クラスの実態

のぞみⅠ組は、3年生までの英語学習においてはフォニックス等の学習メソッドを用いて英語発音の基礎を固めてきた。そのため大変耳がよく、英単語特有の「音の高低」「音素の分解」も上手に捉えることができ、音と文字の結び付けが得意な児童が多い。これを生かし、1単語1単語の「英語としての」正しい発音をさらに洗練してほしいと考えている。また、英語の運用能力が高い児童には、課題の英文のアレンジ等を許容するなどして、全員が意欲的に取り組めるように進める。さらに、「相手の目を見て会話する」や「話をしている人のほうを向き、しっかりと話を聞く」といったマナーも英語力向上において非常に重要であるので、こちらも合わせて指導していく。

6．目　標

① 基本的な語彙、表現の練習を行う。

② キャンプでの自己紹介発表会に向け練習を行う。

③ 様々な活動を通して、英語の楽しさ、面白さを知る。

7．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点および留意点
基本的な英会話の実践力を身に着ける。	●英語であいさつをする。 ●歌をうたう。	●元気に大きな声で発音ができるよう、教員が先導して発声をしていく。
基本的な語彙力を身に着ける。	●単語カードを読む。	●全員がしっかり声を出しているか、楽しく参加しているかに気を配る。
実践的な英会話を体験し、身に着ける。	●キャンプでの自己紹介文発表会に向けた練習をする。 ●ホームステイで役に立つ対話文を、スキットを用いてペアで練習する。	●正確な表現ができているか様子を見て、必要に応じて助言していく。 ●相手の発言に耳を傾けるように促していく。 ●スキットの場面を想像させる。
まとめ	●英語であいさつをする。	

英語科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：はやぶさ組教室

指導者　**藤　石　勝　巳**

1．クラス名：のぞみⅡ組（4年生）

男子13名　女子4名　計17名　聖徳式（個人）平均IQ 145.9

2．授業設定の視点

一人ひとりの興味・関心に応じた英語学習

個々の子どもたちの興味・関心は様々である。また能力差もある。そういった様々な子どもたちの個性に応えるためには、単純な内容だけを取り入れていても、すぐに授業への興味は失われてしまう。そこで英語の授業では「ちょっと難しい内容」、「心地よい緊張感があるスピード」を心がけている。「簡単そうだけどちょっと頭を使わないと答えがわからない。」や「気持ちを集中していないとすぐに応えられない」と子どもたちが感じてくれればと思っている。そして英語学習の基本はしっかり聞いて、しっかり反復練習することでもある。同時に語学の学習においては特に、子どもが他の子どもから学ぶことの大切さを意識させていければと思っている。本校では1クラスを半分に分け、2グループの少人数で指導している。その少人数指導を活かして一人ひとりの能力、個性に応えていきたい。なお高学年ではネイティヴによる授業も行われている。

3．授業のテーマ：“Let’s Enjoy English Camp!”（夏のイングリッシュキャンプに向けて、英語の基礎力と実践力の向上を目指す。）

4．テーマについて

聖徳学園では現在英語教育を1年生から行っているが、移行期間に当たるこの4年生は2年生から英語の授業がスタートした学年である。1～3年生では主に英語の音に慣れ、英語の基本的な語彙、表現を身につけてきた。またアルファベットから始まり、文字と発音の関係を知る基礎となるフォニックスアルファベットを元にし、単語や短い文を読むことや書くことにも取り組んできている。

今までの児童英語教育では、聞く、話すことを中心とする授業が主流で、英語を読むことや書くことにはあまり積極的ではなかった。本校では以前から子どもたちの英語の力を4技能（聞く、話す、読む、書く）のすべての領域で満遍なく伸ばすことを目指してきている。それが将来の総合的な英語力やコミュニケーション能力に繋がると考えてきたからである。今後も時代のニーズに応えることができる実践力を子どもたちに身につけさせていきたい。

今回のテーマは今まで学習してきた内容を総復習すると共に、今後の英語学習の仮体験を行う。同時にこの夏に行われるイングリッシュキャンプに向け、準備、練習を行うものである。イングリッシュキャンプは2泊3日の英語の体験学習で、少人数のグループにそれぞれネイティヴの先生が1人担当し丸々3日間英語漬けになりながら英語を実践体験するキャンプである。成田空港近く

のホテルに滞在し、宿泊している航空会社のキャビンアテンダントやパイロットの方を夕食に招待したり、成田空港に行き、出国前の外国人の方にインタビューも行う。それらの活動を通して、実際に英語を使ってコミュニケーションする難しさと楽しさを子どもたちに肌で感じ取ってほしいと考えている。また希望者はその後、オーストラリアでの学校とホームステイ体験のプログラムにも参加できるので、イングリッシュキャンプで身につけた英語力とチャレンジ精神を現地でも活かしてくれることを期待している。

4年生後半からは、絵本やテーマに基づいた英語学習が中心となる。そして6年生ではさらにテーマを広げ、「水の循環」、「太陽系」、「世界遺産」など、英語を通して環境問題などにも目を向けさせたいと思っている。また本校の英語教育の集大成として、英語スピーチコンテストにも取り組んでいく。

5．クラスの実態

4年生はこのクラスは英語の担当者が4月から変更となり2か月余りが経った。日常的な英語の語彙やアルファベット、フォニックスなど英語の基礎はほぼ身につけている。小学生の耳の良さを活かし、英語の基本的なリズムや発音を自然な形で身につけていってほしいと思っている。

子どもたちの興味、関心も様々で能力差もあるので、全員が意欲的に取り組めるように授業ではスピード感を持って進めている。また英語のコミュニケーンで大切な「相手の目を見て会話する」や「しっかり相手の話を聞く」ということにも留意しながら指導していきたい。

6．目　　標

① 基本的な語彙、表現の練習を行う。
② キャンプでの自己紹介発表会に向け練習を行う。
③ 様々なゲームや活動を通して、英語の楽しさを知る。

7．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点および留意点
あいさつ	1. 挨拶をする 2. 日付等の板書をする 3. 歌を歌う	● 文字が丁寧か ● 元気に大きな声で発音されているか
自己紹介の練習	4. 自分のことを英語で自己紹介できるか練習をする	● しっかり声が出ているか、相手の顔を見て話せているか
英会話の実践練習	5. ホームステイでの会話やお店で注文する英語が言えるか練習する	● 正確に表現できているか ● 相手の発言に耳を傾けているか
まとめ	6. あいさつ	

歴史科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：はやて教室

指導者　**田　中　飛　鳥**

1．クラス名：はやて組　（4年生）

男子26名　女子7名　計33名　聖徳式（個人）平均IQ 155.4

2．授業設定の視点

昔話の場面絵の活動を通して、想像力を高め創造的知能の育成を目指す。

3．主　　題：平家物語『壇ノ浦の戦い』

4．主題について

○教材について

本校のカリキュラムでは、3年生で10時間、『今昔物語』の読み聞かせを行い、4年生で本格的に『平家物語』を扱うことによって歴史教育の導入期と位置づけている。指導の柱は指導者の「語り」であるが、児童はそこから場面を緻密に想像し絵に表わす中で、歴史的想像力を養っていく。ここで培った「場面想像」の力は、4年生の2学期から行われる「人物伝学習」や5年生の2学期から始まる「日本通史」の人物・時代イメージとしてとても重要な原動力となる。

さて、今回扱う「平家物語」だが、先日『扇の的』の学習が終わったところである。最初の頃の場面絵と比べると、子ども達の歴史的想像力が豊かになっていることが一目瞭然で分かる。本校では、初めから鎧や兜を視聴覚教材で見せることはしない。現在あるものから論理的に形を想像し、「この時代に靴は何を履いていたんだろう？」「この時代の電気はどうなっていたのだろう？」という子ども達の疑問を何よりも大事にする。そういった中で、歴史的想像力を育成しているのだが、本時に行う『壇ノ浦の戦い』は、平家物語の中で合戦をしめくくる最後の場面となる。午前と午後で潮の流れが逆転し、源氏が一気に平氏を攻め滅亡へと追い込んでいくという内容だ。ここでのポイントは、壇ノ浦（関門海峡）という地理的な特殊性、潮の流れを利用した戦術、そして船上の戦いにおけるさまざまなエピソード。それらをどのように構図の中にまとめるか、子ども一人ひとりの最後の場面絵の活動を見ていただきたい。

『壇ノ浦の戦い』の学習後は、今まで物語ごとに場面絵にしてきたものを、1枚の紙に連続的に描く“絵巻物”の活動に入る。これは場面絵の学習のまとめとして本校が取り入れている活動である。1枚の紙に場面を区切らずに描いていく中で、歴史学習に必要な時間の連続性を意識させる。また、鉛筆ではなく墨を使って筆で描くことによって、日本の文化・伝統を理解することになっている。

5．クラスの実態

本学級は物語の読み聞かせを大変好むクラスである。国語教材や本、平家物語等の読み聞かせをしてきたが、頭の中に場面をイメージしながら聞いているため、一つひとつのリアクションがとて

も良い。平家物語の『富士川の水鳥』では、「武田軍転ばないで。」「平氏戦えるの？」「ラブレターか。スパイの手紙かと思った。」と、その場面に合わせた反応があった。そういった反応は、本学習が重視している“想像力”の刺激につながっている。

また、全体的に学習意欲が高く、興味をもって授業にのぞむ児童が多い。その積極的な姿勢は「発言」という形に限らず、じっくり考えながら学習を進める姿も含んでいる。本学習においては、場面絵を、時間をかけて丁寧に仕上げていく姿が多く見られる。その時代への様々な疑問や興味を取り入れて何度も描き直した結果である。「この時代の電気は燭台ですか。」と問う児童の声から、次の場面では当たり前のように燭台を描いたり、今と昔を比べる中で洋服や帽子の違いを表現したり。その丁寧な取り組みと物語を聴いていく中で育んだ細やかな想像力の成果が、場面絵の変化として現れてきた。

場面絵の活動では、子ども達の絵を振り返り“多様な視点”について全体で共有をした。養われた想像の世界では視点によって絵の描き方が変わるという話だが、それ以降一人ひとりの個性が視点の工夫として見られるようになってきた。

歴史的想像力の育成を図るために、漫画のような絵ではなく、実際に写真で写したように絵を描くことを伝えてきた中で、視点への意識はひとつの成長点である。今回で最後の場面絵となる『壇ノ浦の戦い』では、興味をもって聴く姿勢と共に、子ども達一人ひとりがどのように想像し、どういう視点で描いていくのか注目したい。

6．目　　標

平家物語を聴き、場面絵にする活動を通して、歴史的概念を具体的につくっていく。

7．指導計画

1. 祇園精舎の鐘の音 …… 45 分× 1
2. 殿上の闇討ち …… 各 45 分× 2
3. 鹿ケ谷
4. 富士川の水鳥
5. 倶利加羅落とし
6. ひよどり越え
7. 扇の的
8. 壇ノ浦の戦い（本時）
9. 絵巻物づくり …… 45 分× 5

8．本時のねらい

『壇ノ浦の戦い』で独自の構図、視点で場面絵を描くことができる。

9．本時の指導展開

ね　ら　い	学　習　過　程	指導の重点および留意点
1. 場面絵を通して、多様な視点について振り返る。	○『扇の的』の場面絵を以下の点をふまえて紹介する。（数名） ① どこから見た絵なのか。 ② 視点によって何がどのように描かれるのか。 ③ 工夫したところ。	○視点によって見え方が変わり、②の違いが出てくることへの理解を深めるため、実物投影機を使用しながら進める。 ○場面の視点は同じでも、距離感によってまた違う絵になることを確認する。
2.『壇ノ浦の戦い』の場面化	○「壇ノ浦」のポイントの場面を紹介しながらエピソードを絞り、読み聞かせる。	○本時で場面絵の活動に入るにあたり、もう一度「壇ノ浦」の内容を読む。 ○視点の違いから絵の違いができることを確認しながら進める。
3. 場面絵を描く。	○壇ノ浦の立地を確認し、どの場面を描くか決めさせる。 ① 俯瞰か横視点か？ ② アップかワイドか？ ③ 平氏の視点か源氏の視点か？ ④ どの場面を絵にしたか？	
4. 視点の紹介	○様々な場面絵の中からいくつかをピックアップし紹介していく。	

10. 評　　価

『壇ノ浦の戦い』で独自の構図、視点で場面絵を描くことができたか。

地理科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：くろしお組教室

指導者　齊　藤　　勇

1．クラス名：くろしお組（5年生）

男子20名　女子11名　計31名　聖徳式（個人）平均IQ 164.8

2．授業設定の視点：一人ひとりの興味・関心に応じて、魚介類の産地を考えていく

3．主題：日本の水産業

4．主題について

本校では2・3・4・5年生で地理の学習をおこなう。その主な内容は次のとおりである。

2年生「視点の転換（前から見ると・上から見ると）、鳥瞰図的視点（学校から武蔵境までの地図）、空間の連続性（川の絵巻物）」 ⇒※年間10時間行う。

3年生「方位、地図記号、地図帳、統計資料、縮図、等高線」

4年生「地図と地球儀、二万五千分の一地形図、日本の地形・気候・人口」

5年生「日本の農業・水産業・工業、世界の中の日本」

2年生～4年生前半では、「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。そして4年生後半から5年生にかけて、自然環境を広い視野から捉え、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成していく。

この主題では、日本の水産業について、その現状と特色を把握させることをねらいとしている。今回の授業は、水産業の授業の1校時目であるので、誰もが知っている寿司を題材にすることで興味付けをおこない、初めに子ども達が知っている寿司ネタに使われている魚介類を挙げさせる。そしてその後、挙げられた魚介類が、国産なのか外国産なのかを自由に予想していく。予想後に資料を配布して読み取ることで、自分たちの予想が正しかったのかを確認していく。最後に、資料をもとに寿司ネタの産地について、気付いたことをまとめて発表させる。

子ども達は「寿司＝日本人の食べ物」というイメージを持っていると思うが、魚介類の種類によっては輸入していることを知ることで、今後学習をしていく日本の水産業の特徴について理解してくれればと思う。

5．クラスの実態

地理の学習を、子ども達は楽しみにしている。4月・5月に学習した農業の授業では、家にあった米袋を持ってきて、気付いたことを進んで発表するなど積極的な姿勢が見られた。

クラス全体では元気で活発な子どもが多く、積極的に意見を述べることができる。挙手も少しずつ増えてきており、話し合いの活動も充実したものとなってきた。現在は、発言のルールがさらにしっかりと守れるように指導しているところである。

本クラスのIQとFQ（知能因子指数）の平均は、以下の通りになっている。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
164.8	172.8	157.6	163.8	166.5	163.6	155.5	180.4	157.8

6．指導計画

日本の水産業　（8校時中、本時は1校時目）

7．本時の主題：寿司ネタのルーツを探ろう

8．本時のねらい

寿司ネタに使われる魚介類の産地を予想していき、種類によって国産のものや輸入しているものなど違いがあることを知る。

9．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点及び留意点
1. 寿司のネタには、どのような種類があるのかを挙げさせる。	自分の食べたことのある寿司のネタを挙げていく。	魚介類を使ったネタのみとする。
2. その寿司のネタは、国産なのか外国産なのか、産地を予想させる。	寿司ネタに使われる魚介類の産地を、予想していく。	具体的な国名を特定するのは難しいので、地域名、もしくは国産なのか外国産なのかの予想で良いこととする。
3. 資料をもとに、寿司ネタの産地を探っていく。	資料を配布して、そこから様々な情報を読み取り、産地を確認する。	《児童の予想》 ● 日本人は、マグロが好きだから国産だと思う。 ● エビは、海外からの輸入が多いので、外国産ではないか。
4. 寿司のネタの産地について、共通点など気付いたことをまとめさせる。	産地の共通点など、気付いたことをまとめて発表する。	海外から輸入している魚介類が多いことに気付かせる。

理科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：理科実験室

指導者　**三　輪　広　明**

1．クラス名：はやぶさ組（5年生）

男子 19 名　女子 12 名　計 31 名　聖徳式（個人）平均 IQ 163.6

2．授業設定の視点：力学的な現象の考察を通して、創造的知能を活用する学習指導

3．授業の題目：球の運動についての考察

4．題目について

小さい頃より、動くものに対する関心がこども達の中に存在する。ミニカーを動かしたり、ビー玉を転がしたりする活動は、多くの子ども達の日常の楽しみとして感じられる時期があるのではないか。身近な所にあるこうした運動への関心を授業で取り上げ、科学的な探求を進めていけないものかと取り上げることとした。

小学校の教育課程の中では、力学的な現象の学習は、2年次におもりで動くおもちゃを作りスタートしている。ここでは、おもりの位置による運動の仕方の変化や、やじろべえなどのおもりの大きさを変えた時の釣り合いを取り上げている。動きとおもりの関係を探っている。その後、3年次では、風車の設計を通して、風を受けた羽の周り方について考察していく。羽の形状を工夫したり、大きさを変えてみたりして、その効果について考えていく。

本単元において、斜面を転がっていく球が同じ高さまで戻っていくのか実験を通し、検証する。更に、なぜ、同じ高さまでいかないのか、更に、より高い高さまで上がっていく為の工夫を考察し、斜面を転がる球に働く力についての考察を進めていきたい。

この後、6年次では、てこのはたらきにおいて、視点からの距離によるモーメントの大きさについての理解を深め、また、振り子の等時性について学習していく。

5．クラスの実態

実験に向かう意欲の強さは、先学年からみられる。それは自らの手で調べていきたいという気持ちの表れと感じる。話し合いの中では、身近な体験から考え深めていこうとする人も多く、話し合いは、活発に進められている。素朴な疑問や、独自の視点から考えを述べることができるのも彼らの良い面と感じるところである。とらわれない視点からの考察が授業の活路となることも多い。授業の中でのこうした発言を通し、問題解決のための糸口を様々な観点から考えだす面が彼らの特質であると感じる。

なお、本クラスの平均 IQ と FQ は次のとおりである。他の因子と比べ、集中思考力が高い点がクラスの特徴として表れている。本題材の学習で発揮されることが期待できる力と考えられる。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
163.6	174.4	155.0	161.5	163.2	169.4	155.8	175.5	154.2

6．指導計画

(1) 坂道をおりてきた球が、どのくらいの高さまで登っていくのか調べる。

……1校時

(2) より高い位置まで登っていくための工夫を考え検証する。

…… 2校時（本時1校時目）

7．本時のねらい

各班で計画した実験を行い、斜面をどこまで登っていけるのか、またその要因となることを導き出す。

8．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点及び留意点
1. 課題の把握 課題1　斜面を下った後、上っていく球が、より高く上っていくための工夫を考える。	○班ごとで立てた実験の計画を確認する。 ○班ごとで役割を決め実験を進める。 ○実験の結果から斜面を上る球の受ける力が何か考える。 ○結果よりなぜそのような結果となったのか考察させる。	○要因として、球や、斜面の状態といったこと等こども達の発想も大事にしながら予想を膨らませていく。 ○班の全員が実験に関われたか。 ○安全に心を配りながら実験を進めることができたか。 ○どの条件が影響あるのか見極められるよう、対照実験となるようにする。
2. 結果の発表 課題2　どのようなときに摩擦力が小さくなるのか。		○摩擦力が小さくなるのはどのようなときか。 ○どこまで転がし始めた高さに近づけるのか、考えさせる。
3. 学習のまとめ		○学習を通し、わかったこと、疑問に思ったことをまとめさせる。

国語科学習指導案

9：30 ～ 10：30　於：はまかぜ組教室

指導者　川　口　涼　子

1．クラス：はまかぜ・わかしおA組（6年生）
　　男子20名　女子7名　　計27名　聖徳式（個人）平均IQ 184.6

2．教　　材：『夜のくすの木』（構え）

3．授業設定の視点：「仮想し推察する」という構えを獲得しているか否かを問う

4．目　　標：仮想し推察するという構えに気づく

5．教材設定の理由

(1) 教材観・指導観

本教材のストーリーテラーである『くすの木』は人間のそれとはまったくことなる時間間隔の中で長い長い時間人々を見守ってきた。そのくすの木が生み出した『時間』と『空間』と、そして見守ってきた『人間』。同じ6年次の主要教材で4月に実施した『野原の声』でもキーポイントとなったのが『時間』『空間』『人間』である。その3つが揃った時に登場人物らのなかにイマジネーションの共鳴が発生した。本教材『夜のくすの木』には、そのイマジネーションを読み手つまり児童の中に発動する可能性がある。本教材の中にも『時間』『空間』『人間』が存在し、児童はそのいずれかに刺激されイマジネーションを発動させるはずである。そういう潜在意識が我々人間には備わっているからだ。では、本教材での『時間』『空間』『人間』を具体的に本文の中から挙げてみたいと思う。これらが児童の潜在意識の発動装置となるはずであり、児童がこのどれに刺激されたのかを見るのも授業の1つのポイントである。

時　間……『大人の手で三かかえはあろうという太い幹』（くすの木の悠久の時間軸）
　　『終バスが着いて』『細い月の出た夜』（夜の闇）
　　『くすの木はあの夜を思い出したのです』（くすの木の見守ってきた時間）

空　間……『母さんの歌声』（夜の闇に響く歌声・聴覚）
　　『細い月の出た夜』『くすの木のあたりはひっそりと』（視覚に訴える）

人　間……『手をつないだ親子』『風呂帰りの母さんと坊や』（母と子）

まずはここまでを指導者は児童に朗読を通じて伝える。児童はここからどのような物語を紡ぐのか。もしその中に裏を見て物語るものがあれば児童はこのくすの木が作り出した3つの『間』そして夜の闇・そこに流れる優しい子守歌から『もしかしたら～かもしれない』という人間の心の中に必ず『裏見（心見）うらみ』の論理を発動したに違いない。その発動の結果を児童自身が発見し見極めていくのが本時の目標ともなる。

(2) 児童観

『一を聞いて十を知る』ということわざがある。簡単に言えば『察することができる』という事

であるが、私たちが『察することができる』のは何故か。それは私たちが私たちの生活の中で様々な経験をし、それを自分の中に蓄積していくからである。しかし、私たちは本当にすべてのことを経験できるだろうか。それは不可能だ。だから、私たちは自分以外のものからもその『経験』を頂戴する。例えば他人の経験談から、例えば本の中から。自分が実際に経験してなくとも、その『借り物の経験』から『おそらく～だろう』という推察をしながら日々の生活を送っているはずだ。だから私たちは、日々を生き、更に多くの学びを得ることができる。だが幼少期の子どもたちは違う。彼らにとってすべてが『自分の世界で自分が獲得したこと』なのだ。彼らのまだ未成熟な世界と成長においては自分が中心であるが故『自分自身が得た経験』と『借り物の経験』の区別がまだはっきりせずすべてを自分のものにしてしまう。自分が実際に経験したことも、本で読んだことも、人から聞いたことも。では、12歳の児童にとってはどうだろう。おそらくその区別はついているだろう。だが、実際の自分の言動がその『仮定の推量』に基づいて行われているという意識は個人差が大きいのではないかと考える。この授業では『意識しているか否か』ということ、そして『私たちは実体験しなくとも仮定し推量し生きている』ということを意識しているかどうかの確認、まだ無意識であればその啓発をこの授業を通して行っていきたい。それを得ることが、子どもたちの更なる成長を促すと考える。

【知能構造のプロフィール―クラス平均―】

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
184.6	193.2	179.5	181.0	184.6	195.7	173.4	187.1	182.0

6．指導計画（4時間扱い）

① 教材『くすの木はあの夜のことを思い出したのです』まで朗読を聞き、その続きの話を書く。……1時間

② 自分たちの書いた話を読み、その違いについて考える。……1時間（本時）

③ 教材『くすの木は足元で小さな歌声を聞いたのです。優しい子守歌です。』までの朗読を聞き、その続きの話を書く。……1時間

④ 各自の書いた続きの話を読み、前回朗読をした部分より後を聞き、それぞれの到達点を確かめる。……1時間

7．本時の目標

隠された世界を見抜くことができるか。

8．本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導上の留意点
授業の構えを作る	授業開始の挨拶をする 素読読本を読む『十七条憲法』 ○前時に書いた続きの話を読み、その特徴と違いを見分ける ○『聞いた話の続きを書く』ということを考える。 ●その続きの話を書いた者は何に刺激されたのか。 その後の物語の朗読を聞く。 授業終了の挨拶をする。	●対照的なものを選定しておく ●幸福・不幸・ありえない話・襲いくる悲劇 ●『隠れていた世界を読んでいた』 ↓ これが『裏見』である それを可能にするものは何かを探る。 ●縦軸に『幸』『不幸』 横軸に『現実』『非現実』 を取り、先に読んだ続きの話がどの世界に位置するかを考える。 ↓ ●縦と横の境界を越えて世界転換を可能にする力は何か？ （どの言葉に刺激を受けたのか） 『もしかしたら～かもしれない』という『仮定の推量』という地点にたどり着けるのか？

国語科学習指導案

9：20 ～ 10：20　　於：わかしお組教室

指導者　**明　石　この実**

1．クラス名：はまかぜ・わかしお B1 組（6 年生）
男子 14 名　女子 7 名　計 21 名　聖徳式（個人）IQ 161.2

2．授業設定の視点：創造的知能の育成

3．教　　材：「人間のなやみとあやまち」（作　吉野源三郎）

4．目　　標：論説文の読解における譬喩と論旨の関係を考える（思考）

5．教材設定の理由

(1) 教材観

この文章は、光村版中学新国語（一）（昭和 40 年版）に掲載されていた教材である。本校では、40 年来論理構成の教材（思考）として取り扱っている。近年、この原書がコミックス化されたこともあり、書店に平置きされるなどしてまた注目を浴びている話題の書でもある。

今回取り上げる部分では、人間の悩みや苦しみというものがどうして生じるのか、またそのことによって、人間としてどんな成長や進歩があるのかを比喩を用いて論じている。

人は、悲しいことや辛いことや苦しいことに出会うことによって、本来人間がどういうものであるかを知る。それは、心の問題だけではなく、体の不調でも同じである。体の苦痛を知った時初めて、人間の体が本来どういう状態にあるべきなのかに気付かせてくれる。また、人間は本来人間同士調和して生きていくべきものだからこそ、敵対し合ったり、憎み合ったりすることを不幸だと感じ、苦しむのだと著者は述べている。

悲しいことやつらいこと、苦しいことに出会うのは望ましいことではないが、そのおかげで我々は人間の本来の姿を知ることが出来る、と逆説的に結論を述べたうえで、そこから「体の痛み」の場合を例示し、「心の痛み」の場合を挙げ、更には人間関係において不調和があった場合も同様であると演繹的に言及していく。

このような筆者の論理構成を必ずしもなぞる必要はない。子どもたち自らがこの文章を並べ替え再構成してみることによって、どのような展開で論旨に迫るかを考えるための教材である。

後半部分で著者は、本当の人間らしさは「人間だけが感じる、人間らしい苦痛」の中に見出せる、と論を発展させている。自分の過ちに苦しんだり、悔いたりできるのは唯一人間のみである。何が正しいかを知っているからこそ、苦しむのである。しかし、人間は過ちを犯しても自分の行動を自分で決定する力を持っている。ゆえに、そのあやまりから立ち直ることもできるのだと結んでいる。論理の構成だけでなく、内容的にも人間の悩みや過ちの意味・価値について、新たな気付きや考え方を獲得することができる教材である。

(2) 指導観

導入として、内容に大きく影響しないところでコミックス本を紹介したい。また、子どもたちが今現在持っている悩みや、辛かった経験、後悔の残っている経験を話題にするところから本教材の導入を試みたい。

その上で、各段落を短冊状にしたものを配り、その並べ替えに取り組ませる。初めは敢えて内容的なことは多く説明せず、子どもたち自身でその短冊ごと書かれてある内容を読み取り、何についてどのように論じているのか、また何を比喩として結論はどこにあるのか等に気付くことを期待したい。

本時は、並べ替えたお互いのものを見比べる過程である。各々がどの部分に着目し、並べ替えたかに注目しながら検討をする。どういう順番で論を展開すれば、説得力が生まれるのか。また、結論の部分をどこに持って行くのか等がポイントになるであろう。子どもたちに自分がその並びにした理由や結びつきを説明させ、互いのものを吟味して著者の論旨理解にも繋げていきたい。

「身体の痛み」についてが、比喩として「心の痛み」の話題に置き換えられるか。「例える方」と「例えられる方」の関係を文章整序という手立てのなかで明確にして、文章全体の構造を捉えられるように助言していきたい。

このような思考や論理の整理、比喩の用い方などは、6年間の国語の学習の集大成として今後取り組む卒業論文にも繋がっていく。文章と深く向き合いながら、その点も意識して授業を進めていきたい。

(3) 児童観

知能構造のプロフィール―クラス平均―

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
161.2	171.3	153.7	158.5	157.7	173.4	148.2	171.5	155.3

高学年になり、思考力の高まりとともに彼らの生活環境1つとっても色々な悩みや疑問を抱き始める年代である。それらは低学年の時とは違い、感情のまま表に発散できるものだけではない。より複雑で内面的な心情は、今回扱う教材の本書に登場する主人公「コペルくん」が抱いている悩みにも共感しやすいものであると考える。そのような悩みがあったり苦しい状況に置かれたりした時、思考によって心情をどう論理的に整理していけるかを、学習を通じて子どもたちに投げかけたい。

クラスは、漢字パズルなど、チャレンジングな課題には特に興味を示し互いに協力し合って問題と向き合おうという前向きな雰囲気を持っている。一方、全体での読み取りなどでは特定の子がよく発言し、結論に行きついてしまうことも多い。それをいかに全体のものとして議論を盛り上げていくかが課題と感じている。集中思考の強いクラスとしてお互いの考えを聞き、更に自分のものとして考えを深めていけるよう、促したい。

5．指導計画（90分×1、 60分×1）

① 文章整序をすることによって、論旨を把握する。

② 整序された、いくつかのパターンを見比べながら論旨を再構築する。（本時）

6．本時の目標

比喩の関係の理解を元に、組織された文章から論旨が把握できる。

7．本時の指導計画

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点と留意点
授業の構えを整える	授業開始のあいさつ 素読を読む	授業の構えを導く
これまでの学習を振り返る	前時の内容を確認する。	
パターンを比べる	整序したものを発表する。	いくつかのパターンに整理しておき、提示する。
文章の構造を考えさせる。	それぞれの考え方を検討する。	手がかりをどこに求めているかを意識させる。
	再度、整序をして、自分たちなりにまとめる。	それぞれの観点を整理させながら意見を交換させる。
	並べかえ以降の文章を読み、筆者の論じているところをつかむ。	
論旨を整理する。	自分の考えと比べる	
	授業終了の挨拶	

国語科学習授業案

9：20 ～ 10：20　　於：学習室

指導者　**板　橋　裕　之**

1．クラス名：はまかぜ・わかしおＢ２組（6年生）
男子 12 名　女子 8 名　計 20 名　聖徳式（個人）IQ 160.15

2．教　　材：「正論と曲論」（領域　思考）

3．目　　標：正論と曲論を比較検討する中で論点と論法を考える

4．教材設定の理由

(1) 教材観

聖徳学園における国語教育は、その領域を「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域及び「言語事項」といった分け方ではなく、「思考」、「感情」、「構え」の3領域と「用具言語」の4つに分け教材を設定している。そこでの視点は、一言で言うならば、児童の成長課題を領域ごとに捉え、成長発達を促す事である。

今回取り上げる「正論と曲論」は、上記で言う「思考」領域に属するものである。

本校では、国語科の最終目標として一人ひとりの児童が論考する能力を身に着ける、といった事を一貫して追求してきた。その総仕上げともいうべきものが3学期に取り組む論文「私とことば」である。論文である限り、テーマに従って資料を集め分析・整理し論理的に記述すればそれでよしとするのではなく、あるテーマに沿って自分なりの仮説を立てそれを論証したり、テーマに対し問題提起をしそれを自らの論理で追究していく事が求められる。

そうした能力を養うためには、一年生の時から最終目標を念頭に意識的に論理的思考力といったものを追究することが必要である。それは裏を返せば、それだけの能力を児童の一人ひとりが秘めているのであり、教師はそれを開花させるよう手助けしていく事が求められているといえる。

論理という観点で言うならば、低学年において「笑い話」や「4コマ漫画」を通し、そのおかしさの仕組みを考えあうといった学習や、中学年において「三段論法」を扱い論理的推論といった学習をすることになる。更に、5年生においては、一休さんなどの頓智話や「嘘つき村と正直村」といった論理クイズをもとに筋道を立てたり、仮説を立てる中で解答を導き出す、つまり論理的に物事を考えるといった経験を積んでいく事になる。そうした一貫した流れの中で、今回扱う「正論と曲論」が位置付けられているのである。

文章を読むと一見すると正論のように思えるものも、筋道を立てて丁寧に分析し想像力も働かせる中でその論理矛盾に気が付き、それは「曲論」であるといった結論に達する、そうした論理的思考力を養うことが今回の狙いである。

同時にこうした教材を扱う場合に考えなくてはならないことは、児童の発達段階といった事である。英才児の特徴として「生意気」といった事がよく言われるが、その生意気さは児童の健全な成

長段階の表れであるといえる。もちろん明らかに屁理屈といった場合や、本人自身は正論を主張しているつもりであっても、実はそれは感情論であったり独りよがり、つまりここで言う曲論である場合もある。その一方で、正論を親や教師に主張することもよくあることである。

そうした発達段階を考えると、今回の授業で扱う中で「正論とは」「曲論とは」といったことを学ぶことは、理にかなっているといえるであろう。

(2) 指導観

上記でも記しているように、成長発達段階という観点で言うならば、今回扱う教材はまさに6年生といった思春期の入り口に差し掛かっている児童に適している教材といえるであろう。

同時に、この年齢の児童は、テレビや新聞といったマスメディアやインターネット等を通し、社会的なものや政治的なもの、また、文化的なものなどに触れる機会が多く、そこから大きな影響も受けることになる。ところが、私自身が知る限りでは、いわゆる著名人といわれる人たちのコメントの中には、はたしてそれが正論といえるであろうか、といったものも多く存在することに気が付く。たとえ話を使い、いかにもわかりやすく説明しているように見えて、実は「事情の違いを無視した曲論」であったり、言葉巧みに話す中で、実は「論点を隠す曲論」といったものを目にする。

だからこそ、これから学ぼうとしていることが、実際生活に結びついているだけでなく社会を見る目を養ううえでも重要であることを感じ理解させながら、授業を展開できればと考えている。

そこで、まず、児童の等身大に立って日常生活の問題の中から考えていくようにしたい。それは、誰でもが経験している自身の日常生活における身の回りに関する親からや教師からの指摘である。「いつも言っているでしょう、勉強をしてから遊びなさい」「今日までに宿題を提出するはずだったでしょう。どうしてやってこなかったの」など、どこにでもあるような大人からの指摘に対し、意識的にいわゆる「いいわけ」をしてもらうことをから授業を始めたい。果たしてそれが正論といえるであろうか、また、いいわけ、つまり曲論であろうか、みんなで考えていければと思っている。

当然、児童の興味・関心も高くそれが本題に入るきっかけとなるであろう。その意欲的な気持ちを大切にしながら、本題においては1つの主張に対しそれが正論であるか曲論であるかを考えさせていきたい。その後、先にふれた「論点を隠す曲論」や「事情の違いを無視した曲論」など、いくつかのパターン別において考えていければと考える。

出来れば、児童自身がその応用として一見正論に見えるが実は曲論である問題を作成できればとも思うが、それはその時の児童の理解度にもよるであろう。

(3) 児童観

既にふれてきたように、本校では国語教育の集大成として6年生の3学期において論文に取り組むことになる。しかし、現実的な問題としてすべての児童が果たしてそうした課題に取り組むことが出来るのだろうか、それが、国語科としての長い間の課題でもあった。習熟度によってクラスを編成しているのも児童の側に立ってその子の能力を最大限に引き出せると考えたからであり、そうした考えに立つならば必ずしも論文という形式をとらなくとも目的は達成できるであろう。

この課題と向き合いながらこの数年6年生を指導してきたが、その結果として言えることは、ど

のクラスどの児童も自分なりの問題意識に立って論文に取り組むことが出来ているということである。その視点や構成力、また、追究の仕方に関しては、それぞれの違いはあるが、自ら問題を設定し、時には仮説を立てその内容に沿って論理を展開していけるのは、やはり１年生の時からの一貫した取り組みの結果であり、児童の能力の高さといえるであろう。

６年生としての授業が始まったばかりのこのクラスの児童にとって、そこまで求めるのはまだ無理があり、どちらかというと素直に物事を受け入れやすい面も持っている。そうした状況において、今回の曲論といた課題に取り組むことは、一つの文章を１つの主張を一方的に受け入れるのではなく、一度立ち止まってその真意を考えたり、客観的に見る視点を養う上で大切な役割を持つ教材と考えている。

【知能構造のプロフィール―クラス平均―】

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
160.15	167.8	153.8	157.8	161.6	164.6	150.6	159.6	153.6

５．指導計画（60 分× 1　90 分× 1）

(1) 日常の出来事をもとに「いいわけ」を考え、そのいいわけが正論であるか曲論であるかを考えあう

(2) １つの主張に対し、正論と曲論の観点から分析しあう（以上　本時）

(3) 曲論といえる根拠を明確にしながらパターン別に分ける

６．本時の目標

正論と曲論とを比較検討する中で、何をもって曲論と言えるかを考える

7．本時の指導計画

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点と留意点
	素読を読む	正しい姿勢と一定のリズムで読む事を意識出来るようにさせる
「いいわけ」について、それが正論であるか曲論であるかを考える	日常生活に於いて時として生まれる「いいわけ」について考えあう	本題である「正論と曲論」とは何か、今回のねらいは何かと言ったことを理解し、興味を持てるようにさせる
上記の課題をもとに、今回のねらいを把握する	想定される親や教師からの指摘例 「いつも言っているでしょう、勉強をしてから遊びなさい」 「今日までに宿題を提出はずだったでしょう。どうしてやってこなかったの」 （出ない場合には教師から提示） 上記の指摘に関し、それぞれがいいわけを考え発表し、その妥当性を検討しあう	誰もが気軽に考えあえるように、出来る限り身近な例を出し合うようにさせる 苦しまぎれのいいわけ もっともらしく聞こえるいいわけ 理屈として成り立ついいわけ 等を発言の中で整理し理解できるようにさせる
教師の提示する一つの主張に対し、その論理矛盾を見抜き理解する	バーゲンセールに関する問題を取り上げ、そこに登場する主人と客の主張に関し、その正当性を考えあう （授業の進度によって、更に一題教師が提示し考えあう）	児童が発言するであろう「正論」「曲論」それぞれの側からの主張を比較検討し考えさせる 進行状況によっては、分類に関しては、次回の課題とする
曲論の種類に関して、その論理矛盾を考えあう中で分類していく	数種類の主張が書かれたプリントの問題に個々人が答えを考え、その後それぞれの矛盾点を考える	
まとめ	上記の各曲論をパターン別に分類しまとめとする	

全　体　会

10：30 ～ 11：40　　於：講　堂

1．あ い さ つ　「英才教育の成果報告」

園長・校長　**和田　知之**

2．園児･児童発表　5 歳児　歌　唱

4 年生　合　唱

3．研 究 発 表　「学校生活で知能を伸ばす」

歴史科主任　**内藤　茂**

平成30年度の研究活動計画

研究部の活動計画

1．研究テーマについて

一昨年まで『英才児の創造的知能の開発と育成』というテーマで研究を進めてきた。“創造性”については「創造的思考」「創造的技能」「創造的態度」の3つの側面からとらえ、これまで、23年にわたり、研究授業を行い、また中間テストや期末テスト、児童の作品なども通して創造的知能とは何かについて議論を行ってきた。その成果については「英才児をさぐる」委員会に引き継がれ、今後成果がまとめられる予定である。また昨年度からは「知能開発を目指した学習指導」という新テーマが設定され、研究を進めている。

2. 実践研究について

本校の実践している英才教育には、先行研究も学ぶべき先例もほとんどなく、したがって、独自に指針を定め基盤を作りつつ、進んでいく必要がある。そこで、各個人の実践研究も、一般的な実践研究とは区別して、テーマ設定を行い取り組んでいる。個々の実践研究については、研究紀要を作成し、公開研究発表会などで配布も行っている。実践研究の設定の指標は以下の通りである。

(1) 指導力を高める実践研究は、日々行われている教育実践の改善や問題の解決に役立つものでなければならないし、その成果が児童の学習や生活に貢献できることを目的とする。

(2) 研究対象は専門性や関心を生かしながら実践の中に定め、本校の教育方針や教科研究部の方針を踏まえ、教科の当面する課題を考慮して決定することとする。

(3) 4月末日までに教科研究部会において主題の報告を行い、その問題点の検討ののち決定する。合わせて研究方法上の見通しについても検討し、教師間において目標や手順についての共通理解を図る。

(4) 教科研究部においては研究プロジェクトとしての立場から協力し、実践研究がマンネリ化、独善に陥らないように相互評価しながら検討して、よりよい研究となるように創意工夫する。

(5) 7月末日までに教科研究部会において実践研究の中間報告をし、進行の状況を説明したり軌道を修正したりして検討を加える。

(6) 夏季研修において実践研究の中間およびまとめの報告をし、今後の実践に役立てるために各教科分科会等で相互に批判し共通理解を図る。評価の主な観点は、授業を通して児童の学力や行動がどのように変わっていったかに置く。

3．校内の研修会につて

校内の研修会は春と夏の2回、児童の休みの期間に数日にわたって行っている。夏の研修会はこれまで宿泊して行ってきたが、一昨年からは校内で行うことになった。また一昨年および昨年は「リーダーインミー」を研修も合わせて行うなど、外部からの講師も招いて行っている。加えて中・高の教員との合同の研修会も行っている。

各自の実践研究については、夏の研修会で発表の機会を設け、成果を共有していけるようにしている。

４. 校内の研究授業について

本校での授業研究の視点は独自のもので、教員の技量向上とは一線を画している。いわゆる一般的な授業研究とは設定自体が異なっており、本校では、精神発達の最前線を捉え、子どもの創造的知能を刺激することのできる方向で、授業研究のテーマを考え、研修を行っている。もちろん新人の教員の研修も一方で行われ、その中で技能向上を図っている。本校の授業研究の指標は以下の通りである。

(1) 授業研究の発表形式は、紙上発表やビデオ公開発表、公開授業の三つとする。内容は技術指導、研究発表、試行的研究、課題研究等について検討を行うこととする。

(2) 授業研究は、教材の解釈や児童理解、学習指導の技術、授業の展開などの研修であるため、その成果を日々の授業に役立てるように考慮する。

(3) 授業研究を通じて本校が当面する教育活動上の課題を具体的に明らかにしたり、児童の持つ特色を明らかにしたりして、教育の方法を探るようにする。また教育課程実施上の問題点を明らかにし、その改善のための資料を得るようにする。

(4) 教科研究部では、授業研究の基本的な方針にもとづいて作成された指導案を検討し、各教師の力を結集し指導案を作成する。検討する項目は、児童の実態把握・教材分析・授業の目標・指導案・学習環境・評価などとする。

(5) 教科研究部では、授業研究終了後、研究協議会で話し合われた結果をもとにして実施された授業を分析・検討し、その成果を総合的にまとめるようにする。
なお、授業研究として設定できるものは以下のものです。

〈その 1〉　聖徳の特色ある授業に関するもの。
〈その 2〉　英才児の反応等を対象とした授業設定や授業展開。
〈その 3〉　二人指導制に関するもの。
〈その 4〉　能力別クラスの実態とそれに対応した授業設定や授業展開。
〈その 5〉　新人研修。

研究授業については全教員で授業の検討を行うものについては毎学期行うものとし、その他教科ごとにも新人研修をはじめ、必要に応じて行われている。また外部の研修会にも積極的に参加してもらい、その成果についても共有できるようにしている。

知能教育研究部の活動計画

本校では昭和44年から小学校における知能教育の実践研究に取り組んでいる。「知能教育」というのは、文部科学省の学習指導要領の内容にもなく、むろん教科書もない。従って、教育内容（カリキュラム）から教材・教具まで全て独自に作り上げていかなければならない。

そこで、我が国の知能教育の先覚者伏見猛弥先生の指導を仰ぎ、アメリカのギルフォード教授の知能構造理論に基づき、実践を重ね、知能教育の基礎を築き上げてきた。現在は、2歳児から小学4年生までを対象にして、一貫した教育内容と方法で、‘幅の広い思考力の育成’と‘創造性豊かな人間性の育成’をめざした研究活動に取り組んでいる。

1．目標及び活動内容

(1) 知能因子の分析と教材開発

知能教育の教材・教具は全て手作りのため、週一回の定例の研究会では日々新たな教材開発を中心に行っている。教材作成においては、次の点に留意して研究を深めている。

① 授業のねらい（知能因子）を十分に押さえる。

② 子どもの発達段階（興味・知識・思考）を十分に考慮する。

③ 単なる子どもの興味だけに流されないで、教育的価値を十分に考慮する。

④ 一人ひとりの子どもの能力に十分対応できるように（能力の限界への挑戦）、内容に幅をもたせ、発展性のあるものにする。

⑤ 学習の流れに変化をもたせるようにする。

⑥ 個別指導について十分に配慮する。

(2) 指導技術の向上

知能教育というのは、知識を教えるのではなく考える力を育てるわけであり、必然的に教科の学習指導法とは異なる点が多くなる。そこで毎時間の実践記録を基に、次の点をポイントにして授業研究を深め、指導技術の向上を図っている。

① 一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を行う。

② 意欲・集中力を育てる。

③ 教えるのではなく、考えさせることに重点を置く。

④ 思考過程を大切にする。（「できた・できない」の結果だけにこだわらない。）

(3) 実践結果の分析と資料作り

2．今年度の活動の重点

(1) 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の充実。能力を更に伸ばす指導法の研究。

(2) 二人指導などの聖徳の特色を活かした指導方法の研究を深め、指導技術の充実を図る。

(3) 『聖徳式知能検査法』の実施結果を分析し、充実を図る。

(4) 授業での実践を通しての研究を継続的にまとめ、常に新しい教材開発。

国語科研究部の活動計画

1．目　標

(1) 言葉に先行する精神発達の最前線における児童の成長の課題と児童を接触させることによりその精神発達を促そうというのが私たちの基本的考え方である。

(2) そのためには，英才児に特有の思考・感情および意識の発達の実態を捉え、その基礎資料に基づいた教材の開発、授業方法の研究がなくてはならない。

2．研究課題

成長の課題を授業として取り上げるためには、これに適した素材がなくてはならない。したがって、検定教科書をそのまま使用せず、幅広くさまざまな文章を集めて教材としている。私たちには成長課題の特定と教材の選定が何よりも重要なことである。

そこで、人間の意識活動を大きく、感情・思考・構えの三つに分け、これに用具言語を加えた四本の柱によって私たちの国語の学習領域は構成されている。

「用具言語」とは言語作業的な領域を含み、主に練習によって習得するものであり、言語作法・文法事項・漢字を含む語彙などである。

「感情」の領域とは、気持ちであるから喜怒哀楽をという捉え方ではなく、子どもたちの感情発達の階梯を見届ける姿勢をとっている。例えば、「ごんぎつね」はひとりぼっちを、「白いぼうし」は現実・非現実を考えるための材料となる。この場合授業は、ひとりぼっちという感情をめぐっての子どもたち一人ひとりの課題，・問題点を整理する場となる。

「思考」とは感情とともに人間の精神活動の重要な一部である。人間の思考路線を、児童の中に追究する姿勢をとり、一人ひとりの思考の内容・方法・段階に接近している。

「構え」とは、身構え・気構え・心構えなどという感覚構造を示す言葉で、母国語の習得を考えるとき、なくてはならない視点であると考えている。われわれは、生まれたときから、人間らしい対象の定め方を習得し、その対象と人間の交わりにおける人間限定のあり方を構えと呼んでいる。

3．今年度の重点目標

① 聖徳学園が目指す国語科教育の追究

「思考」「感情」「構え」の三領域と「言語事項」を教材の基本構造と捉え、子どもの成長課題に接近するといった点が本校独自の基本的な考え方であり、その考え方は常に発展するものと考えている。そこで、カリキュラム成立時の考え方に立ち戻るとともに、児童の成長発達という観点から新たな成長要因を追求するとともにそれに見合った教材も積極的に見出していく。

② 教員の指導力量を高めるための研修

上記の通り、本校では、児童の精神発達という観点から領域が設定され、そのもとで教材を分析し、授業展開が考え出されている。また、同時に英才児ならではの発想の仕方をするといったことを考えたとき、教員の指導力量といったことが特に問われてくる。それに見合う研修を積むということである。

③ 卒業論文指導の充実

論文のテーマである「私と言葉」は、ことばを私という主体者との関わりで論考すること、そしてそれを発表することを目標にしている。

書きながら考える、書くことによって考える、そうすることによってまだ明確になっていなかった問題点をつかんでいく、このような姿勢と能力を６年間をかけて指導していくことになる。

数学科研究部の活動計画

1．目　標

(1) 数量・図形などに関する、基礎的な知識の習得や基礎的な概念・原理・技能の理解・習熟を図り、的確に活用して数学的な処理・考えを生み出す能力を養う。

(2) 数学的な用語や記号を用いることの意義について理解を深め、数量、図形の性質や関係を簡潔・明確に表現し、思考をする能力と態度を養う。

(3) 事象の考察に際して適切な見通しを持ち、論理的に思考する能力を伸ばすと共に、目的に応じて結果を検証し処理する態度を養う。

(4) 体系的に組み立てていく数学の考えを理解させ、その意義と方法を気付かせる。

2．指導方針

(1) 基本的な知識や技能が身に付くように指導していくと共に、知能開発のためにいろいろな角度から考えさせる。

(2) 教えることより、考えさせることに重点を置く。すなわち、原理や法則を教え込むのではなく、それを児童自身が導き出せるように助長していく。

(3) 問題解決学習や発見学習に重点を置く。

(4) 一人ひとりの能力の限界へ挑戦させることと、一人ひとりの能力と個性を啓発し、それに応じた指導を行うために、個別学習に重点を置く。

3．今年度の研究課題

(1) 各単元と知能因子の関係について探り、創造性を生かした授業形態を追究する。

(2) 基礎学力の充実及び能力の限界に挑戦させるべく、個々の児童に応じた指導と教材研究を行う。

(3) 知能開発と数学的思考力の養成に役立つ教材教具の開発と導入。

(4) 一人ひとりの子どもの個性と能力差に応じたきめ細かい指導を行うため二人指導制のあり方を考え充実を図る。

(5) 本校独自のカリキュラム・テキスト教材・指導方法の再検討と熟成を図っていく。

(6) 毎月1回実践報告会を開き、各学年及びクラスごとの指導状況・反応・反省を出し合い、系統的な学習指導の徹底を図る。

(7) 各指導者が数学の指導に関する自主研究テーマを設定し、年間を通じてその研究に取り組む。また、その成果を互いに発表し検討を行うことにより、力量を高め合う。

(8) 授業研究の充実を図るために、校内授業研究や教科内での授業研究を行っていく。

(9) 聖徳の特色ある数学教育を明確にし、推進していく。

英語科研究部の活動計画

1．活動のねらい

(1) 前年度を振り返り、カリキュラムの精選・吟味を行う。

(2) 子どもの活動を中心とした授業、教材に留意する。

(3) 少人数での授業形態を活かし、一人ひとりの個性に合わせた指導に努める。

(4) 授業形態にあわせた「評価方法」に留意する。

(5) 異文化に触れる機会、教材の設定に留意する。

(6) コミュニケーション能力育成のため、スピーチ活動に重点を置く。

(7) 聞く、話す、読む、書く、の４技能を伸ばすカリキュラムを開発する。

(8) 外国人教員とともに指導内容・方法・評価について研究する。

2．方　法

毎週行われている教科会の中で検討していく。

各教員がお互いの授業を研究し、英語科での共通の課題を見つけ取り組んでいく。

また、外部の様々な研修会等に参加し研鑽を積む。

3．今年度の活動の重点

(1) 子どもたちの興味関心や発達段階に応じたカリキュラムになるよう、今まで実践してきたテーマや指導内容についてもう一度検討、吟味していく。

(2) 絵本を中心に、話の内容を楽しみながら、英語の単語や表現をできるだけ自然な形で身につけられるように指導していく。そのための絵本や教材の研究に力を入れていく。

(3) 教員から一方的な知識を与える講義式の授業に陥らないように、ゲームやその他様々な活動を通して子ども主体の授業になるよう心がける。

　また、小学生は音声面で優れているので、歌やナーサリーライム・チャンツなどを通し、この時期にしか身につけられない英語の音に慣れさせる。

(4) 高学年においては英検の内容に取り組むことで、英語の基本的な語彙力・表現力を伸ばしていく。同時に英語の自然な発音や英語の文字を読むことに慣れさせていく。

(5) 小学校での英語教育の評価方法を考えるとき、ペーパーテストだけでは測れないものが多々ある。面接試験を行うことで、子どものスピーキングやリスニングの力を知ることができる。その面接試験のあり方についてさらに研究、工夫する。また英語学習の集大成としてスピーチに取り組ませる。

(6) 現在のカリキュラムに基づいた授業だけでなく、定期的に世界のいろいろな国の人たちと接する機会を持てるような企画を立てる。また、英検などにチャレンジさせ、児童の英語学習の励みとなるようにする。今年度からイングリッシュキャンプをスタートする。

(7) 子どもたちが将来、自ら「未来を拓く」ことができるための英語力を身につけられるように、本校独自のカリキュラムを開発、実践していく。

理科教育研究部の活動計画

1．目　標

(1) 各クラスに応じた授業を工夫し、児童の能力の限界に挑戦させ、学力を保障する学習指導の推進を行う。

(2) 各学年の発達段階に応じた授業を工夫し２年生から６年生までの系統的な学習指導を目指す。

(3) 飼育活動や観察会・見学会などの企画を通して、児童の科学や自然に対する興味・関心の向上をはかる。

2．今年度の重点項目

(1) 英才児の知能を活かした授業の実践

英才児の創造的思考を生かし、発見へとつながる指導方法･内容を開発しその実践を積み重ねる。

(2) 五感を働かせる学習と ICT 化

小学生にとって、実際に手に取って調べる体験は科学認識の原体験として、必要不可欠なものと考えられる。一方、ICT 化は、蓄積した知識や実験結果等を活用し、考察を進める上で大きな力を発揮するものと考えられる。それぞれの利点を生かした指導の在り様を探っていく。

(3) 自然観察会の充実

〈位置付け〉①自然と直接触れる場　②授業への興味付けの場　③授業の発展の場

今年度の主な活動内容（予定）は、以下の通り。

a．植物の観察（3年生対象）　◇川原の草花の観察・スケッチ …… 10 月 13 日（2 学期）

b．動物の観察（5・6年生対象）　◇野鳥の生態の観察 …… 3 月 9 日（3 学期）

c．星の観望会（5・6年生対象）　◇月・惑星の観望 …… 11 月 22 日（2 学期）

d．石の仲間集め（ａと同時開催）　◇石の色・粒子などの違い …… 10 月 13 日（2 学期）

e．川の上流域の観察（4年生対象）　◇川原の石の観察 …… 5 月 12日（1学期）

(4) 特別授業の企画・実施

○ SSISS（Scientists Supporting Innovation of School Science）NPO法人科学技術振興のための教育改革支援計画の特別授業を実施……特別研究理科対象

(5) 理科実験室内書庫の蔵書の充実

図書部と連携を図りながら、小学生向けに留まらず、専門性が高い書籍に触れる場として展開していきたい。

3．継続的に取り組んでいる項目

(1) 実験技能の向上と安全確保を目指した指導方法の開発。

(2) 施設を利用した校外授業の充実。

2 年生『恐竜』◇国立科学博物館の見学 …… 9 月 13 日（2 学期）

5 年生『星』◇プラネタリウムの見学 …… 12 月（2 学期）

(3) 飼育活動（水槽）栽培活動（花壇･温室等）に関する研究。温室を活用した学習活動の充実。

(4) 自然のたより２年生対象の身近な自然の観察記録。週に一度、冊子にして配布。発展的に植物画コンクールへの出品を進める。

地理科研究部の活動計画

1．目　標

① 「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。(2～4年)

② 人間関係を理解する上に於いて、自然環境を広い視野からとらえ、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成する。(4～5年)

2．指導方針

① 鳥かん図的視点を獲得し、空間の連続性を意識しながら、地図を豊かなイメージでとらえていく能力を養う。

② 地図･統計の取扱いについての知識･技能を獲得し、それらを使いこなせる能力と態度を養う。

③ 地図・統計の中から、目的に応じて適切な資料を選択し、信頼性・妥当性を検証した上で、判断の基準の中に組み入れていく能力と態度を養う。

④ 諸外国の文化に対する理解を深め、国際社会に於ける日本の役割を考え、国家および世界の一員としての自覚を深める態度を養う。

⑤ 日本の国土の保全及び地球規模での環境問題について考える態度を養う。

3．今年度の研究課題と教育活動

① 指導内容と教材の精選化

英才児の地図学習のあり方について、研究を深めていく。

5年生の産業の学習において、4年生までの学習をより有効に活用するための教材・授業形態を工夫していく。その際、日本と世界のつながりという点も重点の一つとしていく。

特別研究に関して、特に3学期の世界的な視野での問題解決のためのアプローチについて、さらに充実させていく。

② 学校行事と結びつけた効果的な学習の内容と方法の研究

林間学校・修学旅行などと、地図学習・自然地理・地誌学習との効果的な融合のさせ方について検討していく。また秋の校外授業については、4年生の上下水道、5年生の工場見学などを計画する。

③ 巡検（対象：5年生以上の希望者）の充実

身近な地域での地図の読図など、子ども達の主体的な取り組みを中心にして、毎年行っている。今年度は11月1日を予定している。

④ 作品および教材掲示の充実

スペースを最大限活用しながら、児童の作品や立体地図模型と説明文などを中心に、掲示が学習の意欲付けとなるよう心がける。

歴史科研究部の活動計画

歴史科では、4年生から3年間を通じて、歴史認識に必要なさまざまな思考力を育成することを目標としています。ただ単に知識を蓄積していくのではなく、頭の中に思い浮かべるイメージを大切にし、そこから展開される歴史叙述をもっとも重視します。

歴史学習の第1段階は、「想像力の育成」です。過去の出来事という追体験のできないことを、子ども達が思考や体験の中に持っているものの中から、イメージとして再構築することに授業の重点を置いています。具体的には、歴史学習の導入期として物語を通して楽しく達成できるように工夫しています（昔話・人物伝学習）。

次の段階として、「立場や視点を転換してとらえる思考の育成」に重点が置かれます。その時代の人間になったつもりでものを考え、歴史事象を異なった視点から対比する思考の働きです。

こういった指導は、現代的な発想や一面的な思いこみに偏らない柔軟な思考を可能にさせます。5年生での人物伝学習で、吉田松陰と井伊直弼といった対極的な立場にある人物を扱うのは、このような理由からです。

そして最終段階として、「自分なりの課題を見つけ、資料に基づいた論理的な思考」ができるようにめざしています。ここで言う「論理的思考」とは、物事の原因・結果・影響が相互に関連しながら流れていくことを認識させることです。

こういった思考を学習の中で表現するとき、概念があいまいなままに知識を並べていくのではなく、人間が主人公となって自分なりの仮説や歴史叙述ができるように、一人ひとりの特性にあった働きかけを大切に考えています。

[今年度の重点課題]

1．「学園のあゆみ」における授業深化をめざす

「建学の精神」を子ども達に伝える……私学においては大変重要な課題です。歴史の授業では、卒業を前に人物伝として「学園のあゆみ」を取り上げてきましたが、さらなる教材研究によって、各学年の段階を追った学習をめざしています。

2．課外学習の充実

特別研究を中心にフィールドワーク学習に力を入れています。今年に関しては、より広く家庭でもフィールド学習ができるように、「テレビドラマをもっと楽しめる特別授業」というような企画も考えていきたいと思います。（「西郷どん」はかつての人物伝で扱っていました。）

3．発表力の育成

グループで調べ学習を行い発表する、という旧来のものから一歩進めて、子どもなりに発表方法を工夫させ、歴史的な出来事を寸劇やコントで発表したり、テーマクイズにしたりという指導にも力を入れています。

4．世界文化遺産についての興味関心を深める

富岡製糸工場跡に続き、6年生が修学旅行で訪れている松下村塾が世界遺産になりました。これを機会に今年度の候補地についても調べさせていきたいと考えています。

体育科研究部の活動計画

聖徳学園では、児童の発達に応じた指導を行い、子ども達一人ひとりの能力を最大限に発揮できるようにしています。そこで、体育科では、次のことについて指導の重点を置いています。

1・2年生については「遊び」を中心として、子ども達が体育に対して興味を示し、楽しく学習出きるような教材づくりに重点を置いて指導しています。また、3・4年生では「ゲーム」を中心としてルールを守りながら、集団スポーツの楽しさを教えていきます。5・6年生になると今まで学習してきた内容に更に技術的な内容を加えて、基礎を中心に指導しています。

この時期に技術的な内容を学習することで、高学年での発展へと結びついていきます。特に高学年になると授業での工夫が必要になり、『できるようになるためには』どうすればよいのか?などを子ども達が考えられるようにさせることが大切です。

○聖徳学園として独自性を出した体育科としてのカリキュラムづくり

子ども達の発達段階を十分把握して、教材の工夫などを中心に、子ども達の意欲づけになるような授業方法を目指しています。子どもにとって、わかりやすく、身につきやすい内容にしていきたいと思います。

体育科行事計画

聖徳の体育行事は以下の3つを行っています。

〈運動会〉10 月上旬

毎年、幼稚園と小学校と合同で運動会を行っています。内容については、体育科で検討し、できるだけ新鮮な内容を目指しています。特に児童一人ひとりが活躍できるように役割を工夫して取り組みの場を多く持たせています。

〈マラソン大会〉10 月下旬

マラソン大会に向けて、体育科では練習計画を設定し、実施しています。特に安全面に重点を置き、子ども達が粘り強く能力を発揮できることを心がけています。

〈スキー学校〉2 月中旬

3～5年を対象にして、毎年、3泊4日間のスキー学校を開校しています。場所は長野県北志賀高原にある竜王スキー場で実施しています。自然の冬の厳しさや楽しさを感じながら、高学年は技術の向上、低学年は楽しさを学びながら、スキーに慣れさせていきます。子ども達の様子を見ていると、小学校時期に3回は行けることになり、かなり滑れるようになります。

〈その他〉

この他には、11 月 23 日（祝）に東京都私立初等学校協会の私立小学校との交流として行われる体育発表会にも積極的に参加しています。

音楽科研究部の活動計画

聖徳学園では「一人ひとりの子どもの個性を育てる」、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」、「正しい心、優しい心、たくましい心を育てる」の3つを教育目標として掲げています。音楽科ではこの目標のために、音楽への興味関心を持ち、高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする習慣と心の育成に努めています。また、音楽の基礎的な技術と表現力を発達段階に応じて育み、歌い奏でる楽しさを味わえるように留意しています。

日常の授業では主に、低学年は歌唱と鍵盤ハーモニカの演奏を、中学年は合唱とリコーダーの演奏を、高学年では合唱と合奏を中心に取り組んでいます。また、鑑賞や創作も全学年で取り入れており、鑑賞では想像力豊かに音楽を聴いて文章や発言として表現する活動を、創作では音楽的な理論を理解しながらリズムやメロディ等を作る内容を重視しています。

毎年11月に実施される聖徳祭では、外部会場の大ホールを貸し切り、クラス発表を主体とした合唱・合奏等の演奏を行っています。練習・本番ともにクラス全体が気持ちを合わせ、ひとつのものを表現する喜びを味わう姿は、音楽を通した子どもたちの大きな成長が見られる瞬間でもあります。また、他のクラスの演奏を鑑賞することで聴く力を養います。

「一人ひとりの個性」を尊重しながら集団でひとつの楽曲に取り組み、新しい音楽を創り上げるという活動は、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」ことにも結びつき、さらには「豊かな感性と自立心を育てる」ことへ繋がっていきます。心技体のバランスのとれた子どもの成長のために、現代において音楽という教科の持つ今日的意味・意義は、他の教科と同様に大変重要と考えています。

１．目標、及び活動内容

様々な音楽活動を通して刺激を与え、感性を育て、基礎的な能力がバランスよく身に付くよう工夫する。また、歌唱、器楽、鑑賞、創作の4領域が持つ多面性を授業の中で効果的に生かせるようにし、それが6年間を通じて体系的に作用するよう考慮する。

２．今年度の活動の重点

① 全学年の年間指導内容の精選、及び行事等での活用。
② 一斉指導における児童一人ひとりへの確かな技術指導、及び評価方法の研究。
③ 学校行事（公開研究発表会、聖徳祭等）における各学年、各クラスに適した選曲。
④ 外部講師を招いての特別授業の企画。（4年…リコーダー、5年…和楽器）
⑤ 東初協音楽部会主催音楽祭「さあ　はじめよう」への参加。（4年）
⑥ 希望者を対象としたコンサート鑑賞会の企画。
⑦ 音楽特別研究では研究や創作の活動を、器楽クラブでは行事での演奏活動をしていく。

美術科研究部の活動計画

1．目　的

(1) 各学年の発達段階に応じた課題やテーマを設定し、のびやかな感受性と豊かな創造力が獲得できるように教材を工夫していく。

(2) 個々の児童の個性が作品に反映し、より的確な表現で仕上げていけるように個別指導を確立していく。

2．今年度の重点項目

(1) 個性と能力に応じた、効果的な指導を工夫、開発していく。

(2) 美術に対して興味が湧くような教材及び指導方法を追究していく。

(3) 落ち着いた雰囲気の中で、児童が表現に取り組めるように、授業の展開を工夫していく。

(4) 仕上げた作品に対して、自己評価の時間を確保していく。

(5) 校内の作品展示に接することにより、児童の美術に対する関心や興味が向上し、鑑賞の能力が養われるようにする。

3．研究課題

(1) カリキュラムについて

　絵画表現、彫刻表現、デザイン、工作の関連性とバランスの配慮及び一貫性を持たせたテーマの展開方法を開発していく。

(2) 各学年・クラスの実態に見合ったテーマや教材を開発していく。

(3) 学内展示の充実。児童の作品だけでなく、古今東西の美術作品も鑑賞ができるように展示方法を改善していく。

(4) 東京私立小学校児童作品展への参加については、本校児童の特色が表せるテーマを追求していく。

家庭科研究部の活動計画

小学校の家庭科においては、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけることや、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にする心情を育むこと、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と態度を育てることをねらいとしています。

本校では5・6年生の子ども達の発達段階と生活状況を踏まえ、一人一人の実態に留意しながら、様々な活動に取り組んでいます。その活動に取り組む中で、特に裁縫などの実習では子ども達一人一人の豊かな創造力を発揮できるよう、個々が工夫できる面を数多く作り、個々の創造性に沿った指導を心がけています。

1．目　標

(1) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知る。
(2) 家族の一員としての自覚を持った生活を実感する。
(3) 自分の成長を理解し、家庭生活を大切にする心情を育む。

2．今年度の活動方針および重点

(1) 一人一人の児童が意欲的に取り組み、自分の家庭生活をより充実したものにできる力を育てる。
(2) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知るために、出来る限り実技の時間を保障していく。
(3) 基本的な技術は指導するが、工夫できる面は大いに個々の考えを尊重していく。
(4) 『個』だけでなく、自分と共に生活する家族にも目を向け、『家族』という集団の大切さを意識させる。

研究発表会の歩み

研究発表会の歩み

□ 第 1 回（1969年）

主　題：学校における英才教育

記念講演 「学校における英才教育」	英才教育研究所長	伏見猛彌
○研究発表 「国語教育について」	玉川大学教授	上原輝男
「数学教育について」	早稲田大学教授	岩崎　馨
「知能訓練について」	英才教育研究所	清水　驍

□ 第 2 回（1970年）

主　題：学校における英才教育

○記念講演 「英才教育 5 年間の経過と問題点」	英才教育研究所長	伏見猛彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所指導部長	清水　驍
「英研式知能検査法について」	英才教育研究所員	千葉　晃

□ 第 3 回（1971年）

主　題：学校における英才教育

○記念講演 「学校における英才教育の問題点」	英才教育研究所長	伏見猛彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所指導部長	清水　驍
「知能検査の問題点」	英才教育研究所員	千葉　晃

□ 第 4 回（1972年）

主　題：小学校における知能教育

○記念講演 「小学生の知能とその教育」	英才教育研究所所長代行	清水　驍
○研究発表 「知能診断と教育評価の関連」	英才教育研究所研究部長	千葉　晃
○研究発表 「教科の教育と知能教育との接点」	本校教務主任	園田達彦
○研究発表 「知能教育のための教材」	本校教諭	小林五郎
	本校教諭	郡司英幸
	本校教諭	成田幸夫

□ 第 5 回（1973年）

主　題：知能と学力

○記念講演 「本校における教育」	英才教育研究所所長代行	清水　驍

○研究発表 「知能と学力との接点(1)」 ── 知能指数と学業成績を中心にして ──

本校教務主任　園田達彦

「本校における漢字指導」　本校教諭　小林五郎

□ **第 6 回（1974年）**

主　題：英才教育の追究　── 6 年間の実践と問題点 ──

○研究発表　── 各教科の実践をもとにして ──

「数学科教材に対する児童の取り組み方」

本校教務主任　園田達彦

「歴史教育の方法と実践」　本校教諭　大竹良造

「思考の教材をどのように扱うか」　〃　草野修三

「空気の重さを中心にして」　〃　成田幸夫

□ **第 7 回（1975年）**

主　題：英才教育の追究　── 知能と学力 ──

○記念講演 「現代学校と英才教育」　東京学芸大学名誉教授　大嶋三男　先生

○研究発表 「知能と学力との接点(2)」 ─ 知能構造と学業成績を中心にして ─

本校主事　園田達彦

○分科会研究発表

国語科 「英才児に於ける感情発達の過程」　本校教諭　草野修三

数学科 「知能因子からみた教材構造」　〃　吉井昇

理　科 「理科工作教材を考える」　〃　成田幸夫

地理科 「地図と地球儀に対する児童の認識度」　〃　郡司英幸

□ **第 8 回（1976年）**

主　題：英才教育の追究　── 高知能児に応じた学習指導 ──

○記念講演 「日本教育の課題」　国立教育研究所長　平塚益徳　先生

○研究発表 「知能と行動」　本校校務主任　小林五郎

○分科会研究発表

国語科 「文章理解の方法」 ── 子どもの目に捉えられている場面映像はどのようなものか ──

本校教諭　葛西琢也

数学科 「数学における英才児の特性」　本校主事　園田達彦

理　科 「本校の子どもの理科に関する思考の特性」

本校教諭　成田幸夫

歴　史 「本校歴史科の授業展開」── 因子別にみた知能の発達段階と
歴史科三段階の目標との関連 ──
本　校　教　諭　　大　竹　良　造

□ **第 9 回（1977年）**

主　題：英才教育の追究── 知能開発をめざした学習指導 ──

○記念講演 「英才教育について」── 大脳生理学の立場から ──
東京教育大学名誉教授　　杉　靖三郎先生

○分科会研究発表

知能教育「知能教育の必要性」── 知能の発達過程を中心にして ──
本　校　主　事　　園　田　達　彦

国語科「知能と読みの接点」　本校校務主任　　小　林　五　郎

数学科「数学における英才児の特性とその指導法」
本　校　教　諭　　吉　井　　昇

理　　科「科学的な思考方法と知能因子と学習課題との関連」
本　校　教　諭　　成　田　幸　夫

地理科「地理科における知能因子と学習課題との関連」
本校教務主任　　郡　司　英　幸

□ **第10回（1978年）**

主　題：英才教育の追究　── 知能開発をめざした学習指導(2) ──

○記念講演 「学校教育の現状と課題」 ── 創造性豊かな子どもを育てるために ──
筑波大学教授　　村松　剛　先生

○分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」　園　　長　　和　田　知　雄

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」 ── 意欲と集中力の育成と家庭の役割 ──
本　校　主　事　　園　田　達　彦

教科教育「知能開発（活用）をめざした学習指導」
本校校務主任　　小　林　五　郎

特別研究「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」
本校教務主任　　郡　司　英　幸

□ **第11回（1979年）**

主　題：英才教育の追究　── 知能開発をめざした学習指導(3) ──

○記念講演 「生涯教育と学校」　元文部大臣　　永井　道雄先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知 能 教 育「本園における知能教育」

教 科 教 育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教 科 教 育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第12回（1980年）**

主　題：英才教育の追究 ── 知能開発をめざした学習指導(4) ──

○記念講演 「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官　　渡辺富美雄先生

○研究発表 「卒業生の状況」── 追跡とその状況の分析 ──

本　校　主　事　　園　田　達　彦

□ **第13回（1981年）**

主　題：英才教育の追究 ── 知能開発をめざした
学習指導(5) ──

○記念講演 「未来をみつめての教育」── 子どもの可能性を育てる教育 ──

武蔵野音楽大学
教　　授　　大竹　武三先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知 能 教 育「本園における知能教育」

教 科 教 育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教 科 教 育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第14回（1983年）**

主　題：英才教育の追究 ── 英才教育15周年並びに校舎落成記念 ──

低学年：知能開発をめざした学習指導(6)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(1)

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

知 能 教 育「本園における知能教育」

国 語 教 育「本校における国語教育」

数 学 教 育「本校における数学教育」

理 科 教 育「本校における理科教育」

地理・歴史教育「本校における地理・歴史教育」

英語・体育教育「本校における英語・体育教育」

□ **第15回（1984年）**

主　題：英才教育の追究

低学年：知能開発をめざした学習指導(7)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(2)

○研究発表 「子どものものの見方・考え方」── 国語の授業を通して ──

本校校務主任　　小林五郎

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第16回（1985年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(1)

低学年：知能開発をめざした学習指導(8)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

○研究発表「個性に応じた歴史学習」── イメージから論理的思考へ ──

歴史科主任　　大竹良造

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第17回（1986年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(2)

低学年：知能開発をめざした学習指導(9)

高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(4)

○研究発表「知能開発をめざした学習指導」── 地理・数学の授業から ──

教務主任　　郡司英幸

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」
低学年教育「知能開発をめざした学習指導」
高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」
中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第18回（1987年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：考える力を育てる保育(3)
低学年：知能開発をめざした学習指導(10)
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(5)

○園児・児童・生徒発表
① 歌と合奏　幼稚園年長組　指導者　鎌田禮子、松本阿佐子
② 英語劇　「The King's New Clothes（はだかの王様）」〈原作アンゼルセン〉
中学２年生　指導者　米屋清貴、佐藤久美子、伊神直彦
③ 歌　唱　「山の歌」（夏の山、山のこもりうた、山のスケッチ、フニクリフニクラ）
④ 児童劇　「ぼくたちの……ポチ」〈原作　梶本暁子〉
小学５年生　指導者　内藤茂、仁科建司

□ **第19回（1988年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導

○全体会
① 歌　唱　４年生・指導者：林谷英治
② 聖徳学園における英才教育

●英才教育の基本方針	本校主事	園田達彦
●知能教育	本校教務主任	郡司英幸
●能力に応じた指導	本校校務主任	小林五郎
●個性に応じた指導	歴史科主任	大竹良造

□ **第20回（1989年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 歌　唱　3、5 年生・指導者：林谷英治、関戸道成

② 児童劇　4 年生・指導者：板橋裕之

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」　小　松　賢　司　教諭

□ **第21回（1990年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年：知能開発をめざした学習指導

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 研究発表「聖徳学園における英才教育」

●知能開発をめざした学習指導　葛　西　琢　也　教諭

●一人ひとりの能力や個性に応じた指導　大　竹　良　造　教諭

② 児童劇　3 年生あずさ組「半日村」・指導者：松﨑昭彦教諭・山本友子教諭

③ 歌　唱　4 年生・指導者：林谷英治教諭

□ **第22回（1991年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて

○全体会

① 講　演「聖徳学園の目指すもの」

── 幼稚園、小学校、中学校、高等学校の一貫教育について ──

幼稚園長
小学校長　和　田　知　雄

② 歌　唱　4 年生・指導者：林谷英治教諭

③ 歌　唱　5 年生・指導者：関戸道成教諭

□ **第23回（1992年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を助長する保育Ⅱ

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めてⅡ

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と、小学校の教育」

── 幼稚園、小学校の一貫教育について ──

幼稚園長
小学校長　園　田　達　彦

② 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任　内藤　茂

③ 歌　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

□ **第24回（1993年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて（Ⅰ）

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて（Ⅲ）

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「英才児の作文から、その個性を考える」

研究主任　葛西琢也

教務主任　草野修三

③ 歌　唱　5年生・指導者：関戸道成教諭

□ **第25回（1994年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて（Ⅱ）

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて（Ⅳ）

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「英才児は地図をどう描くか ── 子どもの空間認識と視点の転換 ──」

地理科主任　松﨑昭彦

③ 歌　唱　5年生・指導者：関戸道成教諭

□ **第26回（1995年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて（Ⅲ）

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて（Ⅴ）

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践
── 自由研究･特別研究を中心に ──」
特別研究科主任　大河内　浩　樹

③ 合　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

□ **第27回（1996年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：こどもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅳ）
小学校：英才児の創造性の開発と育成（1）

○全体会

① 合　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

② 講　　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」
幼稚園長
小学校長　園田達彦

③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」
工作科主任　加賀光悦

□ **第29回（1997年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅵ）
小学校：創造的知能の開発と育成（2）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「創造性と学習 ── 数字の実践から ──」
数学科主任　松浦博和

□ **第30回（1998年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅶ）
小学校：創造的知能の開発と育成（3）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「卒業生のその後」　教務主任　草野修三

□ **第31回（1999年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅷ）

小学校：創造的知能の開発と育成（４）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

②　研究発表「聖徳の英語教育」　英語科主任　藤石勝巳

□ **第32回（2000年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（IX）

小学校：創造的知能の開発と育成（５）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

②　研究発表「歴史における概念形成のための想像力の育成」

歴史科副主任　板橋裕之

□ **第33回（2001年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（X）

小学校：創造的知能の開発と育成（６）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

②　研究発表「創造的知能の開発と育成 ── 知能訓練の実践から ── 」

知能訓練科主任　富永理香子

□ **第34回（2002年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（１）

小学校：創造的知能の開発と育成（７）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「聖徳学園小学校の理科教育」

理科主任　三輪広明

□ **第35回（2003年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（2）

小学校：創造的知能の開発と育成（8）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 「創造的知能の開発と育成」── コンクール作品(作文)にみる聖徳児童の創造性 ──

国語科　内藤茂

□ **第36回（2004年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（3）

小学校：創造的知能の開発と育成（9）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

②「聖徳における二人指導制」── 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の追究 ──

教頭　加賀光悦

□ **第37回（2005年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（4）

小学校：創造的知能の開発と育成（10）

○全体会

① 講　　演 「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

② 数学・個性的な解法 ── オープンエンドアプローチを通して ──

数学科主任　齊藤勇

□ **第38回（2006年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（５）

小学校：創造的知能の開発と育成（11）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

②　学習発表「詩のボクシングの実践」── 英才児の個性・創造性育成の場として ──

６年生児童
国語科　渡辺泰介

□ **第39回（2007年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（６）

小学校：創造的知能の開発と育成（12）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

②　創造的知能の開発と育成研究 ── 発明くふう展にみる聖徳児童の創造性 ──

研究主任　松浦博和

□ **第40回（2008年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（13）

個性と能力差に応じた複数指導（７）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　郡司英幸

②　知の冒険心を育む学校図書館

司書教諭　江橋真弓

□ **第41回（2009年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（14）

個性と能力差に応じた複数指導（８）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校･幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　郡司英幸

②　聖徳の理科教育について

理科主任　米持　勇

□ **第42回（2010年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（15）

個性と能力差に応じた複数指導（９）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校･幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

②　聖徳の修学旅行

～子ども達が成長する５泊６日～　地理科主任　松﨑昭彦

□ **第43回（2011年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（16）

個性と能力差に応じた複数指導（10）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校･幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

②　創造的知能の育成

～幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ～

知能訓練科　砂廣芳子

□ **第 44 回（2012 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（17）

個性と能力差に応じた複数指導（11）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 創造的知能の育成　～豊かな視点を育てる（数学・地理の授業実践から）～

（幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ）

数学科主任　細沼克吉

□ **第 45 回（2013 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（18）

個性と能力差に応じた複数指導（12）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 未来をひらく戦士を育てるために

～一年生の学級経営を中心に～　低学年主任　由里敏夫

□ **第 46 回（2014 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（19）

個性と能力差に応じた複数指導（13）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 創造性を育むロボット教育

～特別研究数学の実践から～　教頭　和田知之

□ **第 47 回（2015 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（20）

個性と能力差に応じた複数指導（14）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小　学　校　長
幼　稚　園　長　　和　田　知　之

②　研究発表　自分を知るために～聖徳の国語から～

国　　語　　科　川　口　涼　子

□ **第 48 回（2016 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（21）

個性と能力差に応じた複数指導（15）

○全体会

①　講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小　学　校　長
幼　稚　園　長　　和　田　知　之

②　研究発表　聖徳学園における　児童会活動

児童会活動・学年主任・国語科主任　　板　橋　裕　之

□ **第 49 回（2017 年）**

主　題：英才教育の追究

知能開発を目指した学習指導

考える力を育てる保育

○全体会

①　挨　　拶「英才教育の成果報告」

小　学　校　長
幼　稚　園　長　　和　田　知　之

②　研究発表「本校の自由研究にみられる児童の個性・創造性」

自由研究担当・数学科主任　　米　持　　勇

研　究　同　人

（平成30年度）

〔理事長〕

岩崎治樹

〔聖徳幼稚園〕

園長　和田知之
教頭　松浦博和
主任　磯沼美紀
副主任　伊奈惠理
生活指導主任　荒井明子
年少担任　園山恵理子（知能あそび・リトミックあそび）
〃　北村満利恵（造形あそび・体育あそび）
〃　荒井明子（リトミックあそび・造形あそび）
〃　久保千春（知能あそび・体育あそび）
年中担任　伊奈惠理（知能あそび・体育あそび）
〃　神山祐希（リトミックあそび・造形あそび）
〃　磯沼美紀（造形あそび・リトミックあそび）
年長担任　永坂圭子（体育あそび・知能あそび）
〃　高井正恵（リトミックあそび・造形あそび）
〃　飯濵久美子（造形あそび・リトミックあそび）

専科

教諭　佐藤憲夫（体育あそび）
松浦博和（理科あそび）
〃　小島早苗（英語あそび）
〃　西谷彩（英語あそび）

講師

〃　藤原陽子（英語あそび）
〃　松浦雅美（知能あそび）
〃　大嶋比査子（知能あそび）
〃　臼田愛実（知能あそび）
〃　上ノ宮純子（延長保育）
〃　大槻妙子（延長保育）
〃　小池順子（延長保育）
〃　小山玲子（延長保育）
〃　仲田恭子（延長保育）

〔聖徳学園小学校〕

校　　長　和田知之
教　　頭　松浦博和
教　　頭　大河内浩樹
教務主任　粕加屋直幸
研究主任　細沼克吉
生活指導主任　齊藤　勇
低学年主任　米持　勇
高学年主任　古賀有史

担　　任

つばさ組（1年生）内藤　茂（国語・歴史）
〃　西谷　彩（英語・数学・美術）
みずほ組（1年生）明石このみ（国語・英語・家庭）
〃　杉村健人（数学・地理・美術）
あさぎり組（2年生）米持　勇（数学・理科・工作・ゲーム）
〃　作左部　暉（数学・ゲーム・工作）
しらさぎ組（2年生）渡辺泰介（国語・英語）
〃　小島早織（英語・数学）
あさま組（3年生）桂田　晶（数学・理科・体育）
ほくと組（3年生）長谷川和暉（国語・歴史・知能訓練）
3年学年担任　細沼克吉（数学・地理）
のぞみ組（4年生）三輪広明（理科・数学）
はやて組（4年生）田中飛鳥（国語・歴史・家庭）
4年学年担任　藤石勝巳（英語）
くろしお組（5年生）川口涼子（国語・家庭）
はやぶさ組（5年生）古賀有史（英語・音楽）
5年学年担任　佐藤憲夫（体育）
はまかぜ組（6年生）渡邊孝典（数学・地理・体育）
わかしお組（6年生）齊藤　勇（数学・地理）
6年学年担任　谷口　優（数学）

専　　科

教　　諭　三品亜美（音楽）
〃　高橋まり子（知能訓練・ゲーム・工作）
〃　豊田奈都代（知能訓練）
〃　富永理香子（知能訓練）
〃　地挽裕子（知能訓練）
〃　松尾由香（知能訓練）
〃　砂廣芳子（知能訓練）

教　　諭	淺　利　絵　海（知能訓練・ゲーム・工作）
〃	臼　田　愛　実（知能訓練）
〃	長谷川　眞　子（知能訓練）
〃	歌　田　翔　真（知能訓練・理科）
司書教諭	江　橋　真　弓
養護教諭	吉　村　厚　子（保健）
講　　師	板　橋　裕　之（国語・歴史）
〃	藤　原　陽　子（英語）
〃	中　野　恵　子（数学）
〃	大　嶋　比査子（知能訓練）
〃	内　藤　晴　美（知能訓練）
〃	山　田　桂　子（知能訓練）
〃	フレッド・ラモス（英語）
〃	須　藤　泰　規（美術）
〃	金　子　ゆ　り（美術・ゲーム・工作）
テスター	山　田　多津子（知能検査）
〃	佐　藤　智　子（知能検査）
〃	粕加屋　恵　子（知能訓練）
事務次長	萩　原　夏　美
事　　務	澁　谷　香　耶（庶務・経理）
〃	長谷川　由美子（庶務・経理）
環境美化	岩　瀬　勝　彦
〃	小　池　きみ江

第 50 回　公開研究発表会要項

発　行　日　平成 30 年 6 月 16 日
編集企画委員　松　浦　博　和
磯　沼　美　紀
豊　田　奈都代
発　行　者　和　田　知　之

発　行　所　聖　徳　学　園
東京都武蔵野市境南町 2-11-8
TEL（0422）31-3839
印　刷　所　株式会社　文　伸

©2018（700）